
手乗り魔女と異世界からきた弟子

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手乗り魔女と異世界からきた弟子

【Zコード】

Z2542Y

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

僕のお師匠はとてもかわいい。

どうかわいいかって言うと、食べれそうなぐらいかわいい。

どういう意味かは想像に任せるけど。

妖精種だから手のひらサイズで、大きくなつても十歳ぐらいで、一人称が名前で、ワンピースの丈は短くて、表情がコロコロ変わるかわいい人だ。

そんなお師匠を愛でたりお世話するのが僕の役目。彼女がいれば、

違う世界でもまあ、何とか生きていける気がしている。

一応、帰る方法はあるらしいけど帰る気はない。ずっとお師匠と一緒にいる。

これは念願の弟子がかわいくて仕方が無いサイズ小さめのお茶目な魔女と、そんなお師匠を愛玩するのが趣味な異世界出身のお弟子さんの、『ぐぐぐ普通の日常を適当に書いてみた何かである。

1・お師匠はかわいい

僕のお師匠の名前はセラだ。妖精種だから、とても小さい。蝶のような形の、少し透けて光っている羽を持っている。その羽がある時は、だいたい手のひらに収まるほどの大さだ。

何でも、妖精種が持つ背中の羽は、彼らの魔力の塊らしい。

だから優秀な魔法使いに妖精種が多いのは、生まれ持つ魔力の量が他と比べて桁違いだからということなのだということ。まあ、姿を容易に変えられる種族なのだから、当然ともいえる。

羽がないと、少女と言われるぐらいの大きさだ。本当の姿というわけではないが、少しき方が身体に負担がかからなくて楽なのだそうだ。妖精種はとても大変なんだ、とお師匠は言つ。

確かにそよ風にさえ少し飛ばされかけているのを見ると、大変なのは理解できる。

とはいって、魔法の実験をするときは、羽を消して大きい姿になる。さすがに強風に飛ばされるような小さい姿で、すり鉢で材料を碎いたり、大釜の中身を混ぜるとかはムリらしい。

そんなお師匠は、窓際の一番好きなポジションで読書中だ。もちろん小さい姿で。

時々、その青い瞳を星のようにキラキラさせている。ちなみに、熱心に読んでいるのは魔法書じゃなく、恋愛小説らしい。わざわざ魔法で、小さい姿でも読めるように縮めている。

表情が「口」口変わるお師匠は、見ていて何だかほほえましい。

全体的に、お師匠は白い。そして薄青い。

白いのは服で、髪や瞳は薄く青い。

瞳の色は少し濃くて、肌はとっても色白だ。

手足はほつそりしていて、でも柔らかそうな感じがある。もちろん見た印象で、実際は分からぬ。触ったことがないし……握つたことはあるけど。突風に飛ばされかけてた時に。

お師匠はいつもひらひらしたワンピースを着ている。ゅうくべらべらで、普段着といつよつ寝巻きのよつた感じだけれど、この辺はあまり寒くならないから、薄くても問題ない。

けれど、目に毒だ。

ワンピースの丈はとても短くて、太ももが半分以上露出している。少し風が吹くとめぐれてしまいそうで、といつかめぐれるよつで、お師匠は風が吹くといつも必死に抑えていた。

あまりに強いと、僕のところまで転がるよつに飛んできで、そのまま服の中に入る。ちよつと寒いときもむづや。まるで猫のよつだ。かわいい。撫で繰り回したくなる。

もちろん、そんなことをしたら、機嫌を損ねるのでしないけれど。でも、ちよつと脳内でやってみるだけなら。

「弟子くん、どしたの？ なんかに一やにやしてゐよー？」

「いえ、何でもありません」

今日もお師匠はかわいい。

といつあえず、今日のおやつはお師匠が好きな焼き菓子にしよう。

きつと喜んで、笑つてくれるはずだ。

僕が好きなあの笑顔を、浮かべてくれるはずだ。

特にやるにとも無いので、すっかり散らかった机を整理していたときだ。

「やあやあ弟子くん、何みてたのー？ それなあにー？」

びゅーん、とお師匠が飛んできた。

そのまま器用に身をひねりつつ速度を落とし、僕の右肩にちょこんと座る。

彼女は、僕が作業の手を止めて読みふけっていたものに興味津々のご様子だ。そういうとこは子供のようでかわいいなあ、と思いつつ、口や顔に出でぬよつ心の中に片付ける。

「別に、ただの日記……っぽいものですよ」

「ふーん」

お師匠はあまつこいつのこいつの興味はないらし。

日々の実験などの記録は、それこそ重箱の隅に穴を開ける勢いで書くけれど、日記とか呼ばれるようなものは一切。普通は、こういうのは女の方ほどやりたがる気が、僕はするけど。

僕も元の世界ではそう興味はなかつた。

ただ、なんとなく書き記したいから書いているだけ。この世界はいろいろと、元の世界と理屈が違つてることが多いから、そういうのを忘れないようにメモするためもある。

それと、お師匠の前では『よくできた弟子』でありたいから、そういう地道な努力はあんまり見せたくないなつたり。所詮、ただの『かっこつけ』というヤツだった。

『セラはね、そんなものを書かなくても平氣なの。記憶力だけはば

「ちりーだもん」

ふふん、と白慢そうにこうお師匠。

実際にお師匠は、かなり優秀な魔女の一人だ。時々、昔通つていた魔法学校で、教鞭までとつているらしい。確かメルフェニカという王国だつた……と思つ。世界でも有数の、魔法を重用している国なんだと聞いた。

ちなみにここはメルフェニカに接する隣国……らしい。

師匠はあまり国というものに興味がないのか、メルフェニカ以外の国の大前はさっぱりわからない、と言つていた。加えて家主が出てかないこの家には地図もない。

そんなわけで僕は、自分が暮らす土地の名前も何も、実は知らなかつたりするのだ。

「まあいいや。それよりも今日はねー」

ぐるんぐるん、と僕のすぐ前を旋回する。

彼女の薄青い長髪が、目の前で美しい残像を残した。

「シフォンケーキを作つたんだよ！ セラのお手製なのがー

「……ああ、さつきから甘い香りしてましたね」

「お疲れの弟子くんに、ぴつたりだと思うんだよね、セラは。それでね、せつからおやつの時間にしようと思つてね、セラは弟子くんを呼びにきたわけだつたりするんだよね」

早くおいでー、と飛び去つていくお師匠。

僕はノートを机のすみにおいて、キッチンに向かつた。

3・激甘党と甘い人

お師匠の家 アトリーは一階建てだ。

一階に僕とお師匠の自室と、書斎と物置がある。一階にはそれ以外の生活スペース、台所だとカリビングとか。それからいろいろな実験などをするための部屋。それに使う道具の置き場。庭は結構広くて畑もある。僕が勝手に作った、家庭菜園スペースだ。時々、普通の大きさになつたお師匠が、キラキラした目で若葉を見ていることがある。

「早くおいしいのたべたいね、弟子くん」

そんな風に、ここにこと笑つて。

それから「機嫌な様子で、畑の上をくーるくーる」と飛び回る。

「ねえねえ弟子くん、これとかそういう食べられるんじゃないかなあ」

指差すのは大きく広がる緑色の葉だ。

根菜類らしく、見た目はニンジン以外の何者でもない品種だったと思つ。甘く煮付けたものを食べたことがあるけれど、味も大体同じような感じで、ほつこりとおいしかつた。

この世界の食物は、見た目は元の世界とあまり変わらない。お師匠が作ってくれるサラダにはレタスのような野菜が使われているし、柑橘系のドレッシングがあつたりもある。

「セラはね、弟子くんのお料理が好きだよー。また何か作つてよーう」

「じゃあ……シチューこしますか

小麦粉や牛乳、バターは存在しているから、できないことはない。一度、家庭科か何かの教科書の記憶を頼りに作ったけれど、それなりにおいしくできてお師匠は大喜びだった。あのもつたりとした甘さが、好みにストライクだつたらしい。

わあいわあい、とまるで子供のようにはしゃいでいる。

「木に引っかかるないようにしてくださいね」

やつと開花したんですから、と僕は苦笑した。

お師匠が飛び回っている畑の一隅には、柑橘系の果樹が植えている。

見た目はオレンジ色のレモン……という感じだ。

切つてみると中身はとてもレモン。香りもだいたいレモン。この世界では柑橘類を料理などによく使つらしく、どこの家にも一本か一本は植えてあるとお師匠は言った。

すでに家の脇には品種の違う果樹が、十本ほど植わっている。季節ごとに花を咲かせ実を抱き、食卓に彩を添えてくれているようだ。

僕はとりあえず、手近なところにあるハーブを摘む。昼食に作るサラダにかける、ドレッシングの風味付けに使つためだ。それと、毎日欠かさないオヤツにも使う。

最近はクッキーが続いたから……今日はスコーンにでもしようか。まあ、僕がスコーンと勝手に呼んでいるだけで、実際はそれによく似た見た目と食感のお菓子なんだけれど。

ちゅうどジャムを作つたばかりだから、それをつけて食べるのも悪くない。

「甘くしてねー、とっても甘こぼづがいよー

「はいはい」

「機嫌に庭の散歩を続けるお師匠に背を向け、僕は家に向かって歩き出す。

まったく、お師匠の甘い物好きも困ったものだ。

実験の合間にお菓子。

食後にもお菓子。

寝る前にもお菓子。

とにかくにもお菓子お菓子お菓子。

僕が元いた世界に連れて行つたら、大騒ぎするだらうな。あつちに移住すると言い出すかもしね。魔法なんてものが存在しないとしても、甘味物の前ではきっと些細な問題だ。移住しなくても、再現しろと言われるかもしね。

……まったく、お師匠の甘党にも困つたものだ。

だけどもし、お師匠をつれてあの世界に戻れたら。僕はきっとその手を引いて、ありとあらゆる甘味物を食べせらるんだと思つ。

不恰好なお菓子にも、おいしいねえと笑ってくれるあの人のためなら、どんな出費も苦労も問題ではない。お師匠が笑つてくれたら、それだけで僕は満足。

相変わらず僕はあの人には甘いなあ、と苦笑した。

4・掃除の後はお茶会をしよう

「世界を操る魔法の指輪ってのに、興味はあるかい？」

ある日、お師匠はそんなことを言い出した。

ああ、いかにもゲームのアイテムみたいなのだな、と思つたのは秘密。

「むかーしだけどね、そういうのを研究するのがいたらいいんだよ。どうやらこれに、ただの指輪にそういう魔法を宿す何かが書かれているらしいんだよね。マコツバだけだ」

お師匠は、珍しくヒトの姿をしていた。そして、鈍器のような厚きの本を抱えている。あまりに重そうにしているので、僕はお師匠が本を落としてしまう前にさつと受け取つた。

中に書かれている文字は見事なまでに、読めない。

一応、この世界の文字は大体読めるようになつた……のだけど。

「あ、それふるーいふるーい魔法文字だから。さすがのセラも読めないの」

「じゃあ何でこんなのを……」

「セラが買つたんじやないよ。セラの師匠の蔵書なの一

書庫の整理中なんだよ、とお師匠は腰に手を当てて得意げに胸をそらせた。

普通、小さいヒトが大きくなる場合、グラマラス……とはいかなでも、女性なら年頃というか妙齢といつて差し支えない感じになるのが、よくある『お約束』だと思つ。

しかしお師匠は、どこかがりびつみてもツルーンだ。

出るところは出でない。くじむべきところはくじんでいる。とてもスレンダー。

誰がどう見てもこう思つだらう。

赤いランセルがとっても似合ひそうだね、と。

まあ、それがいいんだけど。かわいいし。

「僕も手伝いましょうか?」

「いいよー、地下の書庫は危ないものー。弟子くんは……そつだ、お菓子作つて」

「お菓子ですか?」

「うん。セラね、疲れちゃつたから、もう少ししたらお茶したいの」

「……わかりました。でも、何かあつたらすぐに僕を呼んでくださいよ」

「わかつてゐー。あのねあのね、セラ、今日はパンケーキがいいの！」

「了解です」

楽しみだなー、とお師匠は地下の書庫とやらに戻つたとして。

「ねえ、弟子くん。世界を操れたりどーに帰りたい?」

振り返つて、そんなことを訊いてきた。少し、寂しそうに微笑んで。

僕は「こ」ではない違う世界からやつてきた。それをお師匠が拾つてくれて、弟子としてこういふと教えてくれた。たぶん、その気になればもう一人で生きてこけると思う。

お師匠は訊いた。どこに行きたいでもなく　帰りたい、と。

世界を操る力があれば、僕が元の世界に帰れるんじゃないかと…

…そう思つてゐるのか。

ねえ、お師匠。

うぬぼれてもいいんでしょうか。

あなたが寂しそうにしているのは、僕と離れたくないと思つてい

るから。

仮に僕が帰りたいといつても、それを叶える知識を自分が持っていないから。

だから寂しそうなんだって、うぬぼれてもいいですか？

「僕が帰りたいのは、ここですよ」

指差すのは自分の足元だ。

「僕はここがいいんです。あなたのそばがいいんですよ、お師匠。元の世界に帰れる日が来ても僕はあなたのそばにいる。僕がいるべきは、あなたのそば以外には存在しない」

「……そつか」

「お菓子、たくさん用意しておきますからね」

今度は僕が背を向ける。

鼻をすする音が聞こえたのは、きっと氣のせいだ。

5・開く、かもしけない

お師匠の家には地下がある。

人を殴り殺せそつなほど大きな錠前が、十個ほどついた扉の向こうに。

何が恐ろしいって、そこには鍵穴が存在しないんだ。穴がない、鈍器として運用可能な錠前だけが、十個ぐらいずらりと並んでいる奇妙な扉だ。はつきり言って意味がわからない。

飾りかと思つてたたら、向こう側へ音が響いていた。

扉の向こうが、空洞になつてゐる証だ。

なぜ地下とわかるかといふと、あの扉と錠前の意味を尋ねたことがあるから。

「あそこはね、セラの師匠のけんきゅーしつなの。それから書庫ね」

といふ、意外な言葉が返つてきた。

「あの人は昔、【古魔法】っていう魔法式を研究しててね。あの扉の向こうで、その実験をしてたみたいなんだ。つて言つても、そのころのセラは学校にいたから知らないんだけどね」

あはは、と笑うお師匠。

お師匠の師は、ここで研究に明け暮れていたそうだ。

そしてある日 ぽつくりと、なくなつてしまつたんだという。

彼 男性だつたらしいその師の弟子はお師匠だけで、彼が遺したもののはすべてお師匠が相続することになつた。

身内はいたかもしれないけれど、魔法使いでなければ使い道がないものも多かつたという。

その中に、この家があつた。

地下の、研究室があつた。

一人の魔法使い 魔法師が、理想を抱いて追い求めた研究が残る場所が。

「でもね、師匠が研究してた【古魔法】つて理論が文献にもほとんど残つてなくてさ、不安定ですしじく危ないんだよね。だから弟子くんも、不用意に地下に入っちゃ駄目だよ」

「はい」

「魔法のせいで空間とかねじれててさ……いや、多分意図的に捻つてるんだろうけど。ありえない広さだつたりするんだよ。シロウトさんは迷うだらうし、そうなると一発アウトかもね」と、少し怖いことを言つてから。

「魔法のお勉強が進んだら、案内してあげるね」

なんて、お師匠は笑つた。

つまりお師匠は、あの部屋を使つていてるということなのか。

「そだよ。本当の本当に危険なじつけんとか書物は、みんなそこには収めてあるの」

「へえ……」

「いくら弟子くんがゆーしゅーでもね、セラは危険な薬品とかを弟子くんがうつかり触らないように気をつけていいわけ。いい子でしょ？ セラはいいおししゃーさんでしょ？」

「ええ、僕にはもつたいたいな」「ぐらいですよ」

小さな頭を指先でなでる。

お師匠はうれしそうに手を細めて、もつともつと、と僕に擦り寄つた。

「ああ、かわいい。

「弟子くんがもつともーつとす“い魔法使いになつたらね、一緒に書庫で本を読もうね」

と、お師匠は笑っているけど、悲しいことに僕が誇れるのは知識の記憶力だけ。魔法の方は本当に初歩の初歩の初歩しか使えない。ひらがなの『し』とか『つ』だけ書ける感じだ。

普通、こういうシチュエーションの場合、何らかの要因で天才的な才能を授かってもいいとおもうんだけれど、あいにくと話す言葉を理解するだけにとどまっている。

……当分聞く気がしないとは、『機嫌なお師匠には言えなかつた。

6・かわいこドラゴン

森の中にまる一ヶ切り開かれた場所があつて、その真ん中には家がある。

それがお師匠のアトリエだ。

たぶん、空から見たらものすくく田立つと思へ。この周囲の森はかなり広範囲で、地元じゃ樹海とか言われてゐるらしい。その中にまつすぐ、古い街道が通つてゐる。

お師匠のアトリエはその旧街道から、少し外れたところにあつた。

「ほんちやーっす。毎度おなじみ『魔女宅配』でーすっ」
元気そのものといった声が聞こえ、続いて。

「はいはいはーい、今いくよーう」と、お師匠が答える声がする。

週に一度の恒例行事。

二階の廊下から下を覗くと、おさげの女の子が見える。この世界でよく使われる宅配サービスの最大手、その名の通りに魔女 女性や少女しかいない『魔女宅配』の社員だ。

確かに年齢は僕より下だったはず。中学生ぐらい。

赤茶色の髪を、無造作に一つに分けて三つ編みにしている。何度か話をしたけど、師匠に負けず劣らずの明るい少女だ。僕より年下なのに、いくつか縁談もあるらしい。

とはいえる人は仕事をしていちらしく、片つ端から断つてゐる
それだけでも。

「いつもいつもわるいねー」

「いえいえー。じゃ、頼まれてたヅシはここにおいときますねー」

懐から先端に飾りのついた、いかにもな魔法のステイックを取り

出し、彼女は宙をかき混ぜるように何度もクルクルと回した。描かれる見えない円の中央に、光が集まっていく。

その光に『あそこに行け』といつづりに、杖の先端を家の玄関のそばに向けた。

すると次の瞬間、そこに木箱や袋がドーンと出現する。魔法で特殊な空間にしまってあるらしいのだけど、いつ見てもすさまじい。

「あ、預ける荷物はあれだよ」

お師匠は庭の隅に積み上げた荷物を指差す。昨日、僕が必死に運んだものだ。

中身はお師匠が調合した、魔法に使う触媒というやつ。お師匠は調合した触媒をることで生計を立てている魔女だ。僕がイメージするほど、魔法は簡単なものじゃないみたいだ。

まず魔法には触媒というのがいるし、触媒には魔素と言つものが必要になる。魔素はそこら辺でも普通に売られているらしいのだけれど、触媒は基本的に自分で手に入れるしかない。

そこらの石とかも、魔素さえあれば触媒になるそうだ。
だけど更なる効果を求めるなら、それ専用に調合しないといけない。

石を碎いて混ぜ合わせたり、草をすりつぶして混ぜ合わせたり。それを魔法には影響がないノリのようなもので固めて、丸く団子状にする。……で、それを箱詰めして出荷するんだ。

調合にはレシピがある。

さながら名店のソースやスープのように、門外不出の貴重品だ。簡単な調合レシピなら市販されている書物に載つているそうで、一流はそれを自分専用に改良するのだという。

お師匠が作っているのは、一般向けの適度に力を押さえ込んだ触媒だ。

要するに、全部買つてきて済ませてしまつ、本職の魔法使いじゃない人用。ランプとかキッチン用品などで結構使われているらしい。乾電池みたいなものだらうか。

ちなみに『魔女宅配』は元が商家で、出荷したブツはその場でお金に変えてもらえる。

「さすがセラさんですねー、これならちょっと割り増しサービスつす」

「わーい」と、いつもより多めにお金をもらつていた。

お師匠が作る触媒は、質がいいので評判なのだといつ。

「では、またのじ利用をー！」

彼女はひらりと軽やかに ドラゴンにまたがつた。ホウキじゃない。あれは間違つてもホウキと読んでいいものじゃない。お師匠もかわいいドラゴンだねー、とか笑つてゐし。

というか、かわいいのだらうか。今にも炎を吹きそつなのが。確かに飼い主になでられてネコのように口口口喉を鳴らしているのは見たけど、一軒家サイズをかわいいとはとても。

「この世界の魔法は、やっぱりなんかおかしい。

孵つてしまつた。
ひよこが。

食用の卵が じゃない。

お師匠が、誰かから預かつたタマゴが孵つてしまつた。まあ、窓際の日当たりのいいところにおいてあつたら、孵りもすると思つ。問題は、それが何のヒナなのかわからぬことだ。

見た目はひよこだ。
ふわふわだ。

「弟子くん弟子くん弟子くん！ ふわふわだよー もふもふだよー！」

と、お師匠のテンションが振り切れるぐらこには。確かに一匹、かごから逃亡を図つたのをとつ捕まえたけれど、ずつとこで、おじいちゃんに、ふわふわのもふもふだつた。

手のひらだけでこんなに気持ちいのだから、わざわざから十羽ほど黄色い塊の中に埋もれているお師匠なんてまさに天国だつた。すつとくらやましこ。

ああ、でもつつかれるのはノーサンキュー。

とりあえず僕はお師匠を、毛玉の中からつまみ出しつ。

「それでお師匠、こつまで預かるんですか？」

「そのうち引取りに来ると思つよー」

それまでムフフー、と再び黄色の毛玉に突撃するお師匠。楽しそうだ。

まあ、見た目はただのひよこだし。後にどんな身の丈に育つか知

らないし、多分知らない方がいいような気がするけれど、とりあえず今は安全で人畜無害のようだからほっこり。

僕はお師匠の笑い声を聞きながら、台所へと向かう。

飼い主が残していつたメモには、万が一にも孵化してしまった場合も書かれていた。要するにエサなどの世話の仕方だ。幸いにも、エサはそう面倒なものではないらしい。

基本的にはレタスとかキャベツみたいな、あの手の野菜を与えればいいようだ。朝食に使った残りがあるので、それを細かく手でちぎってお皿に持った。乾燥ハーブも忘れない。

そういえば、食用の家畜にハーブなどを入れたエサを食べさせて風味をつける、なんてテクニックがあるらしいのだけれど、これもその一環なのだろうか。

中途半端に似通つた世界に、僕は時々戸惑う。食べ物の見た目こそ微妙に違つたりしているのだけれど、名前は同じだし。まるでそれはそういう名前と決められているようだ。

誰が決めるんだよ、と心の中でつっこんで、僕はエサを手にリビングに戻る。

「ふあふあだよ……はふう」

そこには、昇天しかかっているお師匠がいた。

しばらくして毛玉たちは、元の飼い主に引き取られていった。

その後、食用のタマゴに抱きついて暖めようとしていたお師匠に対し、僕はそのタマゴでおいしい目玉焼きを作つてあげたりしたけれど、それは別に語るまでもない話だ。

ずっと氣になっていたことがある。

それは、二つの世界　僕が元いた世界と今いる世界の、奇妙な共通点だ。

わかりやすいところで言うなら、食べ物の呼称。

実はほとんどどうのも無意味なほどに、変わらない。

オレンジみたいなレモン、なんてものはあるけれど、基本的に僕から見たレモンはお師匠から見てもレモン。チーズやバターもあるし、牛乳も飲まれている。

一度、差し入れされた都のスイーツなんて、元の世界のソレと何が違うのかわからぬくらいに生クリームだった。おいしかったし、味も僕が知る生クリームと変わらない。

食べ物だけじゃなくて、たとえば時間の数え方や距離の単位も同じだ。

さすがに暦はちょっと変わったけれど、でも『月』のような区切りがあつて、ひと月三十日になつてたりする。生活はしやすいのだけれど、偶然も積み重なると薄気味悪い。

まったく理からして異なる二つの世界。

それなのにどうして、こんなにも共通する部分が多いのだろうか。……といった話をしたら、お師匠は妙に興味を示してくれた。

『セラの知り合いにね、世界について研究している変わり者がいるんだよ。パメラ・シェルシュタインと言つてね、かの一門にその魔女ありと言われる不老の魔女さ』

お師匠の知り合いでもあるそのパメラという魔女の仮説の中に、僕の話と互いに参考にし合えそうなものがあるという。むしろ、僕

の証言が仮説を裏付ける可能性もあるやうだ。

その仮説とは 世界にはあらかじめ用意された素材がある、といつこと。

それを神様と呼ばれる何者かが、その時々の気分や目的で組み合
わせていろんな世界を作り上げているのではないか、といつ……まあ、かなりぶつとんだ仮説だつた。

だけでもしそうなら僕の話に、それらしい説得力ができる。
レモンはああいう形で、味といつことが、あらかじめ素材の中に
入っていたなら。

「……面白い話だけど、証明しようがないしな」

僕以外の、僕とは違う世界からの来訪者でもいなければ。
とはいえゲームとか小説でもないのだから、そんな都合よくポン
ポンと飛んでくるわけがないのだから。結局、仮説は仮説のまま…
…といつことになるんだろう。

僕たつてどうしてこうなつているのか、いまだによくわかつてい
ないのだから。

ただ恐ろしいほど古い古い魔法には、世界を世界を渡り歩くなん
て記述が残るものもあつたりするといつ話だし、そういうのを使え
ば帰れる……かもしだれないね、なんて感じで。

しかし方法の手がかりはあるけれど、肝心の魔法式はそつぱりわ
からず。

お師匠曰く、【呪喚式】といつヤツの応用じゃないか、とのこと
だけれど何をどうすればいいのかといつレシピは、いまだ見つかっ
てない。そんな魔法があつたといつ記述だけだ。

……まあ、一番の問題は、アレだ。
僕に帰る気がないことなんだろうけれど。

ひどい夢を見た。

誰か知らないけれど、かなり体格のいい誰かに、のしかかられる夢だ。ひどいにもほどがあるというか、苦しいので勘弁してくださいと言いたくなる夢だ。

ひついつ場合、身体の上に何かが乗っているところ。

……本だろうか。

いや、確実に本だろうな。

寝る前に読んでいた。魔法のあれこれが書いてある本だ。僕はまだ見習い以下で、読んでいる本は本来ならずっと小さい年頃の子が見るような内容らしい、けれどかなりぶ厚い。

魔法に関してはまるっきり未経験ゾーンで、知らないことが多いすぎる。だから寝る間は惜しまないけれど、できる限り知識をためようと僕なりに努力しているのだけれど。

重い。

ひつ……ずつしりとした重みがある。やつと目を開けて起きてしまえばいいものを、一度寝たくなってしまった僕は、そんな当たり前の選択肢を蹴り飛ばした。

変わりに、重さを撤去するために腕を動かす。

ここでも目を開ければいいのに、睡魔が飛んでいきそつと開かない。

い。

せりり、としたものに触れた。

……糸だろうか。

それにしては束の間にたくさんのし、長いし、つむぎやして

そうな感触だ。びっくりするほど指通りがいい。シルクの表面のような感じがするから、絹糸もこんな感じだらうか。

さすがに本ではないことを理解し、僕は渋々まぶたを上げる。薄青いそれが、僕の胸の上にあることを知った。

「……」

なんで、いるんだ?

一瞬で目が覚めてしまった。

むしろ覚めすぎて、軽く頭痛さえする。

「……お師匠?」

そこには、ヒトの姿のお師匠がいた。十歳くらいの少女だ。羽はない。彼女ら妖精種の羽と言つものは魔力的な何かの塊らしく、それを消すと十倍以上に身体を大きくできるといつ。なお、羽は元の大きさに戻れば自動的に復活する。

違つ、そうじゃない。

なんでお師匠が僕の部屋にいるんだ。僕の上で寝てているんだ。お師匠は確かに夜遅くまでいろいろ作業をしていたし、だいぶお疲れのようだつたけれども寝ぼけたことはなかつた。

いや、何度かあつた気がするけれど、部屋を間違えた上にこんな、こんな……。

とりあえず僕は、静かに静かにお師匠の身体を横にずらした。同時に、僕の身体を逆の方向にずらした。

お師匠はまさか僕の上で眠つているなんて思つてもいない、穏やかな寝顔を浮かべ静かな寝息を立てている。この上ない熟睡モードだ。静かにすれば、起きないはずだ。

そつとお師匠の下から脱出し、僕が寝ていた位置に寝かします。

「これで//シショノコノペコードだ。

わあ一階にこいつ。朝//はんを作るところがカシマ//シマノンを。

「……弟子くん？」

背を向けて扉に手を伸ばした僕の背に、お師匠の声が突き刺さる。寝起きなのか、どこか舌足らずな感じの声だつた。

ふりかえると お師匠は寝ていた。寝言、のようだ。もう食べられない、というべタな寝言は聞こえなかつたが、お師匠が完全に熟睡しているのはわかつた。

僕は廊下へとすぐるよつに脱出、一階のキッチンに直行。吐き出せなかつた息を、ルームウェアで吐き出つた。

お師匠は朝//はんの準備が終わる//、小さここつもの姿でやつてきた。

「なんかねー、弟子くんのトコで寝てたよー」

「気づいたら進入されました」

「つー、ごめんねー。セラ、疲れてると寝相とか悪いいらしくんだよねー」

たまに外に落ちてることがあるんだよね、と欠伸と共に語られる内容は、スープを作る手元が少し滑りそうになるものだつた。……落ちてたつて、それつて飛んでたつてことですよな。

「でもこれからはきっと、弟子くんに引き寄せられて弟子くんのトコにいくから、とっても安心だよねー。あのねあのね、弟子くんのトコで寝ると、すつ//いくこい夢を見るんだよー」

うふ、と意味深な、けれど意味を知りたくない笑みを浮かべるお

師匠。

僕は決意した。

お師匠を極度の疲労にさらしたこと。

僕は基本的に、お師匠のアシスタントといつが、雑用係だ。

お師匠が求める触媒の材料を倉庫から引っ張り出したり、毎日の食事を栄養面もそれなりに考えつつ作り、求められたら即座に甘味物も作りお茶の相手をする。

で、そのついでに魔女の弟子らしく、魔法のお勉強といつのもこなす。

とはいって、触媒を作るところまではできるのだけれど、いざ魔法にするとなるとまったく感覚がわからない。マンガよろしく唸ればいいのか、長々と呪文でも唱えればいいのか。ちなみにお師匠はシンプルに一言。

「【黒色魔法式】展開」

ぐりいだつた。一般的にはそんな感じらしい。唱えなくても使えるらしいけれど、唱える方が意識がより集中するのだそうだ。掛け声のよくなもなんだと思つ。

あと魔法によつては長々と、呪文を唱えたりするそつだ。
もつとも、そこまでいくと魔法というより祈禱、もしくは儀式の範疇らしく、あんまり魔法は関係なくなるのだといつ。……びつやら、そういうのと魔法は別の何からしい。

さて、お師匠の手の中には黒い結晶が転がつてゐる。大きめにとっては、ちょっと飲み込むのは無理だなあつて感じの大きさ。つやつやとした、ガラスのような光沢がある。

これはさつきお師匠が使つた魔法で作られた結晶だ。
微弱な魔力で光り続ける効果がある。

「と、いうわけで、弟子くんには『ランプの火』を作つてもらおつか

お師匠はトレイに材料を載せ、僕の前に置いた。

ついでに使い込んだ秤も。

「レシピは教えたよね？」

「ええ、まあ」

「じゃあよろしくね！ これは試験なんだよー。もし大丈夫そな
ら、イトコにセラが連れて行つてあげるー。ダメなら連れて行く
けど、イトコにはならないからね」

「はあ……」

よくわからないけれど、抜き打ちテストのようなものらしい。だ
が、それでいいのかと言いたくなるほどかなり簡単だ。ちゃんと材
料を計つて、全部をきれいに混ぜればいいだけ。

モノによつては順番やタイミングも重要だそうけど、これは関係
ない。

その代わりに分量が重要だ。

ランプの火とは、これぞまさに乾電池と呼んでいい代物。

触媒を別の物質 この場合は黒い結晶に再加工したもので、特
定の器具の中もしくはそばに行くと自動で魔法式が展開され続ける
という代物だ。どう見てもこの世界版乾電池。

ランプだと、通常なら電球やロウソクを置く場所に結晶の台座が
ある。ランプによつては光の強弱も調節でき、結晶は基本的に熱
を持たないから必要ない時ははずすことができた。

……と言つても長持ちするものじゃないから、適度な需要がある。
大きいものだといい値になるので、お師匠も特大のを中心によく
作つていた。まあ、ハイリターンが期待されるものは、だいたい材
料もいい値なのでボロ儲けにはならないんだけど。

大きいものはそれ相応の材料が必要とされ、今、僕の目の前にあ

る手のひらに乗る程度の結晶を作るよつたな材料じゃ、たぶん一瞬で燃え尽きてしまつような不良品にしかならない。

科学が元の世界を発展させたよつて、この世界は魔法で発展してきた。

あの火種が作られてから、街中は夜でも明るくなつたといつ。口ウソクは日常生活から何かの儀式的な用途へと持ち場を移したらしい。礼拝とか、そういう感じの。

あと結晶の寿命はパつと見ではわからないから、念のために常備もそれでこるらしく。

……やっぱり電池だよな。

「じゃ、やっぱ向ひの仕事するからねー。できたら持つてきてー」

お師匠はひらりと小さくなり、そしてふわふわと飛んでいった。仕事じやなくて昼夜ですよねとは言えない小心者の僕は、おとなしく材料や秤とのにらめっこを開始する。基本的に赤魔法の応用なので、材料もそれによく使われるものが多い。

火薬とか、赤い石とか。

それを黒く染め上げるのは黒の魔素 魔法を、魔法とするためのもの。

一般的に【五色魔法式】と呼ばれている中で、まだ研究が進んでいないのが黒だ。ところよりも安全な魔法式 レシピが作られた数が、圧倒的に少ないとも言つ。

それだけ不明瞭なところが多い、という感じなのだそうだ。で、その数少ないちゃんとした魔法式の代表が、ランプの火といふわけで。

「さあてと……まずはこれから計るか

鉱物が多いので、乳鉢でしつかりと「パリパリしなければいけない。そうしなければムラができる、いい商品にならないからだ。基本的に、触媒として用いる材料はすべてキレイに混ぜ合わせなければいけない。それが別物への再加工ならなおのこと。僕は袖をまくつて、作業に取り掛かった。

11・才能の褒め方

……さて、僕は正座してお師匠の話を聞いている。
僕の目の前には黒い残骸。あの結晶とは似ても似つかぬ謎の物体。
ランプの火となる黒い結晶を作ろうとした僕が、最終的に作り出したのは……まあ、失敗作というやつだった。

手順は間違つてないはずだ。

というか、間違えるほど複雑でもない。

あらかじめ教えられたレシピの通りに材料を混ぜるだけだ。料理で言つと田玉焼きのようなもので、もしもかの料理を間違える方法があるならぜひとも聞いてみたい。

だけど僕は失敗した。

……どうで間違えたんだろ？

「というわけで、弟子くんのセーセキはっぴょーをします」

僕の前でお師匠は、ふわふわと浮いていた。

妖精種の羽は魔力の塊で、羽ばたかなくても浮いていられるのだと言つ。というか羽ばたく力は皆無なんだと、本には書かれていた。
……だから強風に抗えず飛ばされているのか。

「あのねー、セラの羽はどうでもいいからねー。ジロジロみないの

ー

「はー」

「やつぱり弟子くんはヤ、魔法式の展開がちょっと……うん、ダメダメな感じだね」

お師匠はくるりと一回転し、ヒトの姿になる。

そして僕が作った残骸の一つを摘んで、しげしげと眺めた。

「触媒の調合までは問題ないよ。一応結晶はできてる」
だけど、とお師匠は続ける。

「キレイに固定化されてないっていうか、そんな感じ。使えないもないけど、たぶんね、一瞬だけペカツと光って消えちゃうと思つ。失敗作じゃないけど、ダメダメな感じ?」

「どうしてだらうね、となぜか問い合わせられた。
そんなの、僕が聞きたいくらいだ。」

「正直なところ、中途半端に成功するなら最初から失敗してほしい。「これはパメラの世界構築理論と、セラの予想なんだけどね。世界の素材はあらかじめ用意されていてさ、それをやりくりしてたくさん世界が、存在しているとするよ」

「はい」

「作られた世界には、その世界固有の『理』があるんだろうね。そこで生み出されたすべての物体は、その『理』という方式にのつとつて作られるんだと思うんだよ、セラは」

「それはつまり……僕がいる世界には魔法がない。魔法という『理』が存在しない世界で作られた存在だから、魔法式を扱うことができないという意味なのだろうか。

確かに、そうするのが一番わかりやすいと思つ。
納得もできる。

「つまり僕は魔法使いにはなれない、ということですか」

「まあ……そうなるね。とはいえた同じ材料で作られた肉と魂なら、今後の訓練次第で眠っていた力がペカツと目を覚ますかもしれない。希望は捨てちやダメダメなんだよ」

「……はい」

「それに使えないなら使えないで、開き直ればいいんだよ。セラみたいに触媒調合専門の魔法使いになっちゃえば。それに弟子くん

にはね、もつともつとすばらしき才能があるよー。」

「才能、ですか？」

「そーだよ、そいの一だよ。なんたって弟子くんはね、お料理が上手なの。おいしそよ。サラダのドレッシングも、スープも、お肉を煮込んだのもね、もちろんお菓子だっておいしいの」

にへら、と表情を緩ませた、幸せそうな笑みを浮かべるお師匠。どこかで見たような、と思い出すまでもない。毎食とおやつの時に見せる、恍惚としたそれ以外の何者でもないからだ。ここに来てだいぶ経つたけど、お師匠はいつも同じ反応をする。

ちらりと視線を向けた時計の針は、この世界で言つ『おやつの時間』を指していた。

「つまり『おやつくれ』ということですね」

「えつ、ちちち、違うよー。セラは今ね、すげく弟子くんを褒めたのー。」

「はいはー」

「あああ、あとねあとね！ 弟子くんの場合『自分が使うのがアウト』だから、ランプみたいな仕組みなら魔法が使えると思つんだよ！ 具体的にはわからないけどね、可能性なら」

「スクーンですか？ パンケーキですか？」

「生クリームたっぷりのパンケーキ三枚重ねー。 つてちがーうー！」

違うの一、と大騒ぎするお師匠を放置して、僕はさっさとキッチンに向かう。

まあ、人間そう都合のいいことばかりではないので、天才的な魔法使いになれるとか思つたこともないし。むしろ似通つた世界に飛んできた以上の幸せはないと思うんだよね。

確かに使えたら、それはそれでいろいろ便利なんだらうけど。

「弟子へん弟子へん、違つんだよ、違つのー」

「はいはい」

肩に乗つてぶつぶつこつお歸匠は、適時に返事を返しつつパンケ
ーキを焼く。
やつぱつ、石をすりつぶすよつこつこつ作業の方が、好きかな。

……お歸匠も喜んでくれる。

こつものよつて朝アサヒむとを作つて、こつものよつて飯ハシとおやつ
の準備をして。お師匠は氣ままに読書をしたり、時間のかかる実験
の経過を伺つたり。そんな、他愛ない日常に。

「こんちやーつす！」

聞きなれた少女の声と、周囲の木々を揺らす羽ばたきの音が追加
された。

窓から空を見ると、細身の青黒アオイロいづろいづろをつづりドラゴンが降下し
てくるのが見える。

友人が持つていたゲームに、ドラゴンに乗つて戦つているキャラ
クターがいたけれど、彼らが乗つていたドラゴンと似ているよう
と思つ。飛ぶことに特化した、身軽な感じだ。

ゆつくつと降下したドラゴンの背には、毎度おなじみの彼女がい
る。

「毎度おなじみ『魔女宅配』でーす」
「『J'kruーわまー』

一階にいたお師匠が、ヒトの姿になつて近寄る。

ああ、ドラゴンの羽ばたきに吹つ飛ばされたからな、前に……。

僕も慌てて一階へ向かい、外に出た。いくらヒトの姿になつても、
そのヒトが非力なことこの上ないお師匠だから、荷物の類は基本的
に僕が持ち運ぶことになつていて。

もちろん魔法を使えば簡単なんだけど、お師匠はそういうのは人
力を好んだ。世の中には身の回りのすべてを魔法でまかない、料理
さえも魔法で仕上げるものぐさがいるそつだ。

で、そのものぐさな魔法使いとお師匠は仲が悪いのか、自力でできる仕事を魔法でやるのを極端なほどに嫌う。なのでお師匠が作るのは、ランプなど生活必需品に使うものだけ。

「こつも」苦労様です、ミーネさん

「いえいえー」

ひょい、とドリコンから降りた魔女 ミーネ。

ゆるく結われた三つ編みが、身体の動きにあわせて揺れた。

「さてさて、いろいろ仕入れてきたんですけどどうですか？」

「……君は宅配業者なのか、商人なのかはっきりしたりどうかな」「ふふ、ウチは副業オッケーですしねー。これで顧客もゲットできるですしー」

さあさあ、ミーネさんはいつものようにステイックを駆使し、魔法で繋がる特殊な空間からモノを目の前に出現させる。それは、僕が今まで見たことがない不思議なものだった。

水面のように、自然ときらめく宝石か何かの原石。

青のグラデーションが美しい布。

後は見たことがあるようないような、果物や野菜など。

イカや魚もあつた。特殊な空間はイコール冷蔵庫というわけではないらしく、魚介類はカラカラの干物になっていた。これはこれでおいしそうで、思わず頭の中のレシピ帳をめくる。

「んー、これってさ、やっぱあの水上都市かー?」

「そうつす。ちょうど臨時で手伝いに行つてたんですよね。ちょうどお祭りの時期で、噂の歌姫さんを空からジーっと眺めさせていただきました。いやあ、キレイだった」

「水上都市と……歌姫?」

「はいはいはーい、説明はこのミーネさまにお任せをー」

言葉と共にポポンとこつ感じの破裂音がし、見ればミーネさんが

謎の本を手にしていた。

なぜか、メガネなんてオプションまで。

「水上都市つていうのは、文字通り水の上の都市。歌姫も以下同文です」

海の上にあるその都市には歌と、霧が満ちている。海路の重要な拠点であると同時に、そこは現存する【古魔法】の一つを管理し、現代にも伝えている一族が収める国。

都市全体で守り伝えてきた【古魔法】は、声を触媒にする魔法。使い手は主に女性で、ゆえに魔女ではなく歌姫と呼ばれる彼女らは、国民にとても慕われている。

と、説明はされたものの、にわかには信じがたい。

「そんなこと、できるんですか？」

「一応はね。何たら魔法式一つていうのも、その名残らしいし。ただね、声が届く範囲じゃないと魔法の効果はないし、魔石っていうレアなアイテムが必須になるから面倒なんだよー」

「だから廃れた、と」

「さすがセラさんのお弟子さん、飲み込み早いっす」「さてさて、とミーネさんはやりと笑った。

「ここにありますよ、その神祕の都市の名産品！ さあさあ、早いもん勝ちっすよー」

「んー、どうするー？」

「……じゃあ、干物を各種、三つずつ。それからこの布を少し

「まいどー！ ……ところで布は何に？」

「お師匠が盛大に破ったカーテンの補修に」

「あー、大変ですね、ガンバっすよ」

商品とお金を交換すると、ミーネさんは颯爽とドア、ゴンにまたがり、飛び去っていく。この辺は範囲は広いのだが、人手が足りないらしく、彼女はいつも忙しそうにしている。

家の上空で挨拶するように数回ぐるぐると回り、彼女は次の場所へ飛び去っていった。

荷物を抱えて家に戻りつつ、僕はミーネさんと交わした言葉を思い出す。

海の上に浮かんだ、歌姫に守られた霧の都市。森の中に住んでいるから忘れそうになってしまいかけれど、この世界にもそれなりに海が存在していて、そこに都市まで浮かんでいる。

その噂の水上都市に……少しだけ、行ってみたい気がした。

嵐が来るかもね、とお師匠まつぶやいた。

「……この辺、そんなに荒れるんですか？」

「時期によつたらねー、結構雨とか風とか、すごいんだよう

「へえ……」

「雨とか風……まるで台風だ。」

まあ、いつもして家があり続けるということは、家にダメージがあるほどは荒れないんだろうと思うけれど。でも屋根の修理ぐらいは覚悟した方が、後でガックリしないですむだろつか。

「そだねー、準備しないとね」

「食料とか買い溜めするんですか？」

「それもあるけど……うーん」

お師匠は窓の外を見ながら、煮え切らない様子だった。

「なんかねー、精霊がざわざわしてるんだよね

「……精霊？」

「そ。この世界にいる、基本的に目に見えない存在、あるいは現象。彼らが踊つた後に残されるのが魔石でね、魔素はその代用品として開発されたんだ。魔石は珍しいから」

窓際の定位位置にかき集めたクッショーンの海に、お師匠はダイブする。

「そのせいなんだろうねけどねー、昔の魔法は精霊との結びつきが強かつたんだよ」

その言葉に、僕は自然と作業用のテーブルにおいてある大瓶を見た。中には無色透明の小石がじゅうじゅうと入つてこる。全部、お師匠

の頼まれて森の中で拾つてきたものだ。

時々、あれを材料と一緒に碎いて混ぜ合わせることがある。最初はてつくり何かの触媒になる、ただの石だと思つていたのだけど、貴重なものなんだと聞かされた時はびっくりした。

確かに抱きかかえやすいサイズの大瓶に半分溜めるまで、結構時間がかかつたし。

魔素という便利なものが作られるのも、よくわかる。

「こゝは精靈が多いからねえ……もしかすると『精靈女王』が生まれるのかもね」

「女王、なんですか」

「彼らに性別はないといつたが、見田は女性らしいから女王なんだつてやー」

昔からのお説だよう、と寝返りを打ちつつお師匠は言つ。

だけど精靈そのものを使役するとかいう類はない、とのことだ。人によつてはまさに神の「」とく崇め奉つてゐるらしく、[冗談でもそんなことを言つたらぶん殴られる]のこと。

「でも、田に見えないのによくねこまでも崇められる……とこつか、信じられますね」

「基本的に、だからね。魔法使いとしての才能が高こと、彼らを見ることができ。特に女王になるような力を持つ精靈なんかは、魔法使いじゃなくたつて見れるよー」

セラも時々みかけるのー、とお師匠はこここしていった。

どうやら、精靈を見ると幸運が招かれる、という言い伝えがあるそうだ。お師匠の師がここにアトリエを構えたのも、この森が精靈が多く漂つて来訪するスポットだからとのこと。

「だつて魔石高いんだもーん、拾う方がお得だよー」

と、今にも眠そうな声で言つながら、お師匠は「うううう」と転

がつた。ああ、完全に睡魔にさらわれる直前といった感じだ。そんな無駄に抗つてないで、寝てしまえばいいのに……。

「うー、ねるー」
しばらぐして、お師匠は仰向になつた。
やつぱり嵐かもね、とお師匠はつぶやいて、目を閉じる。
外は、惚れ惚れするほどの青空だった。まだ言つてゐ、と半分疑いつつも、僕は静かに庭に出て洗濯物を回収する。そしてそれから一時間もしないころに、外は真っ黒になつて。

豪雨と風が、世界を飲み込んでいった。

「めんなさい。

首にまかれた黒いひも。
わたしはわるいこだつた。

おかあさまは、あんなにすごい歌姫だつたのに。
わたしは、わるいことをする、わるい子になつてしまつた。おかあさんに、もうどこにもいなおかあさんにおこられぬ。『めんなさい、『めんなさい……ハーヴェルはわるい子です。

だけど、わたしの声はもうもどりてこないのです。
にどと歌うことができないのです。

わたしは歌姫としてダメだから、黒いひもで声をいろいじてしまつたから。

だから、わたしはなみだをポロポロとおとすだけ。
ずつとくらしていた、神殿の前。ポイ、と、『ミミのよひにつまみ出されて。わたしはすわりこんで泣くことしかできません。だつて何もできなくなつてしまつたから。

まわりの人は、見ているだけ……でもない。
だれも、わたしを見ていません。

だつてわたしは、この場所のために何もできない、ダメな子だから。

やくたたず、だから。

きっと、このままおなががすいて死んでしまつんだら。首に黒いひもをまいた歌姫は『ざいにん』だから、ハーヴェルはわるい子だから、みんなにきらわれてしまつているから。

わたしは、おかあさんを『じぶにして』生まれてきたと、神官さまに言されました。わたしには、ハーヴェルにはそれだけのいみがあつたのに、と言われました。

だからがんばったんですね。

つめたいお水につかるしゅぎょうも、がんばったんですね。
すごいすごいと言われる、そんなおかあさんが大好きだったから。
おかあさんのむすめとしてはずかしくない歌姫になつて、おかあさん
が天国でようこんでくれるよつにつて。

だけど、だけど。

おかあさん。

ハーヴェルは何がいけなかつたんでしょうか。

おかあさん。

ただみんなのために、歌つていただけなのに。

おかあさん。

「お前、歌姫なんだつてね」

誰かがわたしのそばにやつてくる。

見上げると、そこにはとてもきれいな女人の人人がいました。

神殿を守つている兵士さんが、おどろいたようすで神殿の中にも
どつていつて。そして神官さまがもつとあわてたようすでとびだして
きて。わたしを抱き上げる、その女人の人を見て。

「不老の魔女が、何用だ」

「捨て子を拾つただけだが、何か問題でもあるのか?」

「その子は」

「希代の歌姫リエル・シルスの娘ハーヴェル。知っているさあ、貴様に横から搔つ攫われたかわいいかわいい弟子候補の娘なんだからな。……だ・か・ら、こうして迎えにきたのさ」

「まじょ、とよばれた女のは、長い長い耳をぴくぴくと動かしている。」

「本で読んだことがあつた。」

「この女のは、エルフ種なんだ……。」

「ああ、といひで『次の娘』は育つてゐるのかい？だからこの子を捨てるんだがう？」

「……何のことだ？」

「それともあれかね。齡十四の美姫の身体を手に入れたら、もうそつちは役立たずになつちまつたのかね。マリエルはもう死んじまつたからねえ……かわいいかわいい、姫を残して」

「……つ」

「てめえの下種なタネでもさ、娘が生まれるならつて上が見逃したんだよ。命の恩人をポイ捨てとはね。神官さまも落ちのトコまで落ちたもんさ。それでも娘に手は出さないんだねえ」

「きさま……この私を愚弄するのか！」

「近寄るんじゃないよ、この恩知らずのクソ野郎が。それ以上近寄つたら物理的に種無しにしてやるよ。さすがに呪いでダメにするのは、色々と『かわいそう』だらうからねえ……」

わたしをだきかかえたまま、まじょさんはたのしそうにわらつてゐる。黒い、きれいなドレスがひらひらと風にゆれて、長くて黒いかみのけが、まるでおどつてゐみたいにゆれている。

「なあ、ハーヴェル」

まじょさんはわたしを見て、ニヤニヤとわらって。

「どうだい？ アタシのところにこないかい？」

わたしは、こぐらかしてへんじをした。
神官さまは……真っ青になつたまま、わたしたちを見ていただけ
だつた。

一通りの家事を終えてリビングに戻ると、テーブルや床に並べたりと本があった。そういうえば書庫の整理をする、とかお師匠が書いていたのを思い出す。

「手伝いましょうか？」

「んー、地下に運び込むからいいよー。下から上に持っていくのだけ手伝つてーー」

「わかりました」

ということで僕は暇になつてしまつた。

ソファーに座つて、とりあえず目の前にあつた本を手に取る。開くと、僕にも読める文字で書かれていた。さつと目を通した感じ、古い何かの文献か、研究をまとめた本のようだつた。

「……これは？」

「古い魔法の資料だよー。前にも言つたけど、【古魔法】は基本的に声も触媒として使つていたんだけどねー、逆に言つと声がないと魔法が魔法になつてくれない感じだつたの」

本を抱えてリビングにやつてきたお師匠が、床に本を置きながら説明してくれる。

その時代の魔法は、聞けば聞くほど僕が知るよくある魔法だ。

「声なしに魔法が使えないから、今より魔法犯罪者への罰も手つ取り早かつたんだよ。声を殺してしまえば、それで終わつちやうのも。それが【呪術式】の、呪いの始まりなんだよ」

「覚えておきます」

「いいよいよー、【呪術式】はともかく、今はもつ声を使う魔法なんて、そうお目にかかるないものー。水上都市の歌姫だつて、お人形みたいに大事にされるから罪人にもならないし

「まあ……言い方は悪いけど、貴重品ですからね」

「モーゆーことなのだよ、弟子くん」

お師匠はまた一階に戻つていく。読まない本と、読むよつになつた本を、こうして定期的に入れ替えているのだけど、僕は地下に入れない的な意味でさほど役に立てないのが悩みだ。

まあ、ここに運び込まれたものを上に持つていくことはできる。それまで少し読書でもしようかと、僕は適当な本を探して。

「 」

換気のためか開けつ放しになつている戸口に、彼女がいることに気づいた。

小柄な……たぶん、まだ十歳にもなつてない子供だ。

ゆるく癖のついた、わずかに青が見える黒い髪。……いや、これは黒というより黒に近い灰色と言うべきかも知れない。髪は毛先が地面につきそうになるほど長かった。

彼女は不安に揺れる灰色の瞳で、僕をじっと見ている。

「えっと、君は近所の子？」

「 」

ふるふる、と首を横に振つた彼女は、ずっと握つていたらしい手紙を差し出した。

そこにはたつた一言『セラベ』とだけ、きれいな文字で綴られて

いる。

封筒の裏には貝殻を模した美しい判が押されていた。

そこに添えるよつにして、パメラ・シェルシュタインという名前が書かれている。僕の記憶が正しければ、お師匠が『世界について研究している変わり者』と言つた魔女の名前だ。

「お師匠、ちよつと」

「んー？」

お師匠を呼んで、手紙を渡した。

僕はお師匠の背後に回って、その手紙を見る。

そこには、こう書かれていた。

『この子はハーヴェル・シルス。元水上都市の歌姫さ。事情があつて引き取つたんだけど、連中には恥つてもんがないらしくてね……ちょっと徹底的にやりあうから。ククク、アタシヒシエルシユタインをなめんじやないよ、あのペド野郎が。徹底的にしぶしてやるつもりだよ』

「……ねえねえ弟子くん、『ペド野郎』ってどうこいつの意味？」

「要するにヘンタイってことです」

詳しい説明をしても何なので、簡潔に説明する。

ヘンタイかー、それは確かに問題だね、とお師匠は不愉快そうに唸つた。

この世界でもそういう類は、あまり好まれないようだ。

『つてことで、連中がハーヴェルを諦めるまで預かっておくれ。お礼は弾むからや』

「……なにこれ」

手紙を手にわなわなと震えるお師匠。

僕は思わず手紙を持ってきた少女　　ハーヴェルを見た。

びくつと身体を振るわせた彼女は、そのままつむいてしまう。大丈夫、と笑つて頭をなでてやると、少しだけこわばつた表情が緩んでくれた。まだ、打ち解けてはくれないけど。

「パ……」

問題はお師匠の方だった。このハーヴェルという名前の子供がひどい田にあって、そこから救い出したけれど問題が終わっていないのは、さすがにお師匠にもわかっていると思つ。

しかし……まあ、いきなり巻き込まれたらそつも言つてこられないわけで。

手紙を握り締めている手が、ふるふると震えている。
そして。

「パメラのばかああああ！」

朝からお師匠の絶叫が響いた。
こうして、この家に新しい住民が追加されたのである。

トントントン、と野菜を切る。
とん、とん、と野菜が切られていく。

横目で様子を伺いながら、僕は夕食の準備をしていった。隣には、危なつかしい手つきで野菜を切っているハーヴェルがいる。……実際に緊張した、こわばつた表情だった。

「料理は初めて?」

「

」ぐり、と頷かる。

質問してから、そういうえば彼女は『歌姫』だと思い出した。なにせ町を一つ浮かし続けるために必要な存在なのだから、料理なんてするはずがない。というが必要が皆無だらう。

ケガでもされたら困るだらうし、何より召使がたくさんいただらうし。

そのわりに来ていた服は、シンプルで質素なものだつた。もしかすると着替えさせたのかもしれない。あるいは、あの格好でどこから追い出されたのだろうか。

ハーヴェルとの出会いから数日。

ミーネさんを通じて僕らが知つたのは、彼女が受けたひどい仕打ちだつた。

類まれな力を持つ歌姫を母に持ち、しかしそれに似合う力がなかつたハーヴェル。

たつたそれだけの理由で、彼女は居場所をなくした。

その『声』すらも殺されて。

拳句、向こうの都合次第では連れ戻される可能性があるといつ。実際に腹立たしいことだ。今ほど自分に戦う力がないことを、恨んだ時はない。戦えたら、どれだけ安心できるか。

誰が来ても追い返すと、怯える彼女に約束できない自分が情けない。

本当に、情けない話だった。

「

「ん？」

くんくん、と服を引っ張られる。

ハーヴェルはどこか自慢げな表情で、彼女用のまな板を指差した。全部切れた、ということらしい。きれいにさいの田きりされた野菜が、まな板の真ん中にちょこんと山になっていた。

多少は大きさにばらつきはあるけれど、充分に許容範囲。少なくともお師匠よりは、ずっとずーっとマシだ。

あの人、魔女としては天才なんだろうけれども、いかんせん、こういうことがまったくできない。させるだけムダとは、まさにお師匠のための言葉なんだと僕は常々思つ。

元々僕だって、料理とかはそうできる方じゃない。

ゆで卵とかぐらいなら作れる、という感じだ。繕い物なんてしたこともない。むしろ掃除以外の何もかもを、こっちに来てから本格的に触れてみたと言つてもいい。

それもこれもお師匠が何もできないせいだ。

そして 僕がそれ以外に何もできないせいでもある。

「よくできました。じゃあ、向こうで休んでいいよ。あとは僕がやるから」

「

しかしハーヴェルは動かない。

鍋に野菜を入れる僕を、じっと見ているようだ。……調理を見学

したい、といふことなんだろうか、これは。キッチンは結構広いから、邪魔にはならないけれど、少し緊張する。

とりあえず、僕は鍋に油を入れて野菜を炒めはじめた。

今日は野菜たっぷり具沢山スープだ。焦がさないよう具をかき混ぜる僕の手を、ハーヴェルはじつと見ている。彼女はどこからか椅子を持ってきて、その上に立っていた。

視界の端に、ふんだんにあしらわれたフリルが入る。

ハーヴェルが着ている服の装飾だ。

たまにテレビで紹介されていた、ロリータなるジャンルの服に近い感じがした。まさにお人形と言つた感じの、かわいらしい洋服だ。
……ちなみに、お師匠の余所行き用衣装の一つ。

普段は装飾のカケラもないワンピースだけど、それなりの場所に行くときには、やはりそれなりの格好をするらしい。僕は一度も見ただことがないけど。シンプルなのが好みだそうだ。

でもお師匠にも絶対に似合うから、普段から着ればいいのに。そう言つたら、それじゃ余所行きの意味がないんだよう、とお師匠に怒られてしまった。

……乙女心はよくわからない。

17・添い寝リターンズ

「……眠った？」

「ええ、まあ」

夜遅くに、僕とお師匠はリビングにいた。

ハーヴェルはいない。お師匠の部屋にあるベッドで眠っている。僕は紅茶を二人ぶん淹れて、テーブルに並べた。

「あー、今日も疲れたー」

ヒトの姿をしているお師匠は、ソファーの上で胡坐をかいでいる。

……いろいろ危ういのでやめてほしいんですけどね、ええ。

お師匠の服は、どれもこれも丈が短いから。

「もう魔力すっからかーんだよー」

しばらく羽は出ないね、ため息混じりにつぶやいた。

そう、お師匠は自ら望んでヒトの姿というわけじゃない。妖精種の羽は魔力の固まりだ。あれは使い切らなかつた魔力を、羽の形に固定しているのだと言つ。要するに、あれはストックというわけだ。普通なら使い切らない。

しかし魔法によつては、とんでもない負担を支払つことがある。そうすると妖精種はある小さな姿を保てず、ヒトになつてしまつのだ。

「……でもなんでヒトの姿に?」

「さあねー、セラもわかんない。そういうの的一大つて認識だもの」

「不思議ですね」

「空を飛ぶだけで魔力を消費するから、魔力が無くなると飛べなくなつて、でもあの大きさだと危ないからヒトの姿になるつていう説

があるけど……まあ、そんなもんじゃないかなー

「当事者がそんなアバウトでいいんですか」

「だって『そなな』んだから仕方ないよう。調べる技術なんてないしー」

「ずずず、と行儀悪く紅茶をするお師匠。

よくわからないけれど、お師匠が言った説は結構わかりやすい。確かにあの大きさで足元をりょこりょこされたら……踏まない自信は僕に無い。お師匠が相手でも、自信が持てない。

自己防衛というヤツなんだろつか。

何にせよ、とても便利だ。

時と場合とお師匠の服装にも寄るけれども。

たとえば今なんかは、あまりよろしくないタイミングだ。お師匠が使うベッドは一人用で大きいとは言ひがたく、子供とはいえ二人も眠れるほど面積はない。

僕のベッドはふた周りほど大きいからいけただけど、もしベッドを入れ替わるとしても明日からの話だ。さすがに眠ったハーヴィルを、起こすようなことはできない。

普段ならベッドは本を置く場所で、お師匠は部屋にある綿やら何やらを詰めた籠の中を寝床として使つてゐる。しかしヒトの姿ではさすがに使えない。かなり困った状態なのだけれど、お師匠はなぜかうれしそうに笑つてゐる。

数秒後、その意味を僕は思い知つた。

「ひつなつたら仕方ないね。セラが弟子くんに添い寝をしてあげよ

う

「結構です」

「遠慮しなくてもいいんだよ。まあ寝よ、ほら寝よ」

「僕は床でいいです」

「師匠命令には従いたまえ、さあ、添い寝だよ」

「だから、僕は床で……」

「じゃあ、セラも床で寝るよ。弟子くんが寝るところで、セラも一緒に寝るの」

さりに数秒後、僕は自ら折れることにした。そのまま続けてもたぶん堂々巡りだし、どうせ朝起きたら隣にいるんだろ。結果が同じなら、もう最初からおとなしくする方がマシだ。

がんばれ、僕の理性。

朝起きて三人分の食事を用意し、家事をこなしつつハーヴェルの様子を伺い、お師匠の手伝いなどをし。昼食を作り、日替わりおやつも作り、夕食の準備をし、汗を流して眠る。それを何度も繰り返していくうちに、僕はある問題に直面した。

ハーヴェルだ。

彼女の首には、黒く禍々しいあざがある。一見するとそれはレースのようで、美しくすら見えるけれど、その黒いあざのせいにハーヴェルは声を出すことができないでいる。

声を出せない、というのは不便だ。

他のことをしながら問い合わせ、それに対する質問を得る……とか、僕が日常で普通に使っていることができない。これで迷子にもなられたら、それこそ大騒ぎになってしまつ。

何かしら、意思疎通する方法はないだろうか。

僕は何通りか手段を考え、ある日、夜中にお師匠に相談してみた。

「やっぱり筆談ですかね」

「んー、無難だよねー。問題は文字を教えなきゃいけないことだけ

だー」

「……そういうの教えないんですね、その神殿とやらの人たちは「必要がないからじゃないかなー」

お師匠がいふには、歌姫というものは禁められる存在なのだそうだ。

時々人前に出て禁められて、普段は歌をうたつたり世話をされたりするだけの日々。必要なないことは何一つとしてさせずにして、もしも『使えない』となつたら捨てる。

だから歌姫は、ハーヴェルは基本的な知識がない。年齢もあるんだろうけれど、文字の読み書きもできないし簡単な計算もできない。たぶん、僕以上にこの世界を知らないと思う。

……いや、知らないように育ててきたんだ。

下手に知識をつけられたら、自分たちの言つことを聞かなくなると思って。これはまさに道具扱いだ。道具として使い勝手がいいよう育て、そして捨てた連中への怒りがこみ上げる。

まあ、そいつらを詰つても問題は解決しない。

殴りこむにしても水上都市は遠いし、前提条件である殴りこむだけの力もない。兵士か何かにバッサリ切られておしまいだ。それに長く続いた行為を、止めるだけの材料もないし。

歌姫がいなければ都市は終わってしまう。

都市に暮らす人は、きっとかなりの数いるのだろうから……彼らと歌姫を秤にかけて、そして選んだのが今のシステムなんだと思う。いや、そう思わないとやってられない。

もしもくだらない何かのために、ハーヴェルがこんな目にあつたなら。

僕は……。

「とりあえず文字のお勉強だねー。セラ、メルフュニカの魔法学校で時々特別せんせーもするから、一応『人に何かを教える』のはそこそこ得意な方だと思うんだよう」

と、そこでなぜかお師匠は、にやりと僕を見て笑い。

「弟子くんも、文字は読めるけどあんまり書けないから、一緒におべんきょーだね。例の日記だつて二ホンゴつてので書いてるでしょ？」セラには読めないからわかるんだよー？」

「おっと僕には用事があるので失礼しますよお島丘」

僕はすばやくその場を離れた。

……れて。

僕は今、お師匠とハーヴェルと一緒に、近くの町に来ている。この世界に来た時に、僕が散々さまよった場所だ。

魔法大国であるメルフェニカ王国の隣、同じく魔法を重視するノイン王国。ここに来て長い時間が経つたように思つけれど、僕は初めて自分が住んでいる国の名前を知った。

白いレンガつぽい資材で作られた建物は、実にオシャレな雰囲気がある。ヨーロッパのような感じと言つべきだろうか。道は整備されていて、ところどころに噴水と公園がある。そこには子供がたくさんいて。

「こやー！ やめれー！」
なぜか、お師匠が追い回されていた。

一応、買い物に来たのだけれど……あの様子では無理かもしねない。ちなみにハーヴェルは子供たちに混ざつて、一緒にお師匠を追い回している。どことなく楽しげな様子だ。

僕は近くのベンチに腰掛け、はしゃぐ子供の声を聞きつつ周囲を眺めている。ここはちょうど町の中心部で、僕の位置から見て左右に伸びているのが大通り 街道の一部だという。

右がノイン王国の首都へ、そして左がメルフェニカ王国だったはずだ。

この道をメルフェニカ方向へ進むと、ランドール領があるという。お師匠曰く、魔法使いは行かないほうがいい場所だとか。何でも極度の魔法嫌いで、バレたら命はないのだとか。

特にお師匠 妖精種やエルフ種など魔法が使えて当たり前の種族だと、実際には使えなかつたとしても問答無用で追い出されたり、白い目で見られたり、ボラれたり……などなど。

聞くだけで恐ろしい町だ。

そんなところに到着しないでよかつたと思つ。

いや……異世界から来たなんて言つたら、たぶん魔法使いがそれに似た何かに認定されてしまうだろうし、そうなると何もわからぬ僕としてはまさに人生の終わりなわけで。

「

くんくん、と服を引っ張られる。

いつの間にか僕の背後に、ハーヴェルが立つていた。

彼女を見て僕は、ここに来た理由を思い出す。ハーヴェルの服やら何やら、ともかくいろいろと買い込むために来たんだつた。……問題はお師匠が、未だ追い回され続けていることで。

「あー、先に服の店に行つてますからねー」

と、僕は軽く声をかけるだけにし、ハーヴェルと手を繋いで店に向かつた。

背後から薄情者だの何だの聞こえるけれど、聞こえないことにする。

初めて『町』に来たのか、ハーヴェルはどこか楽しそうだった。表情はあまり変わらないのだけれど、だんだん彼女の感情を掴み取ることができるようになつてきている。

そんなハーヴェルが、ある店の前で足を止めた。

「

ちらり、と商品と僕を交互に見る。

ガラスの向こう側にあるのは、人形が纏ういかにも女の子らしい服だつた。

今の服ほど装飾がゴテゴテしていない、シンプルな感じのワンピ

ース。足元にはリボンがついた靴に、髪飾りもある。値札を見たところ、結構なお値段のようだけれど……。

「 」

じいっと、見られている。

一応、僕がサイフを預かっているし、そこそここの金額は持つてきただけど。さすがにちょっと高すぎるというか、森の中で着る服じゃない、かな。普通にしていても結構汚れるし。

とりあえず店の中に入る。

ハーヴェルは店の中に入ると、手ごろな値段の服を見始めた。どうも、この店にある服が気に入つたという感じらしい。ほつと胸をなでおろしつつ、ちょこまかと移動する彼女について歩く。ピンクピンクした店内は、ちょっとだけ居心地が悪い。

「 ！」

ある服とリボンを手にとつて、ハーヴェルは僕を振り返る。

これまたいかにも女の子、という感じのワンピースだ。

Tシャツっぽい生地でできている。すそには濃いチェックの布が、ひだを作るよう縫い付けられている。リボンはその布と同じもので作られていて、黒いレースで縁取られていた。

「 こういうのがほしいの？」

「 ぐぐぐ、とうなづかれる。値札に書かれた値段は手ごろだ。これならあと三着ぐらいは買っても大丈夫だろ？」そういうと、ハーヴェルはうれしそうに僕に抱きついてきた。

だんだんと感情を表に出してくれて、僕はうれしく思った。

その後、僕とハーヴェルは他の店を巡り、それぞれで服や靴、髪

飾りなどを購入。ついでに筆記用具の類も入手して、そりそりと
にカフェでちよつとした甘いものなども食べてみた。

夕暮れが始まりかけたころに、お師匠と別れた場所に戻ったのだ
けれど。

「……ぐすつ、ひどいよう」

木の上でひざを抱えてすねたお師匠の説得に時間がかかって、結
局、そのまま一泊する羽目になってしまった。今度からは、しつか
りとお師匠を確保してから移動しようと思つ。

庭の果樹に実がなつた。

どうも元の世界とはいのい違つようで、果樹は基本的に数日おきに一つか二つは実をつけてくれる。何ていつか……ゲームみたいだなあ、とか思つたりする程度に規則的だ。

とはいえこれはこれで便利なもので、なぜならぼく毎日何かしらの果物を収穫することができる事がわかつてゐる。それらを利用する料理などを、効率よく献立に加えられるのだ。

朝から僕はハーヴェルに籠を持つてもらいつつ、レモンっぽい果物を収穫する。

っぽい、が要らないくらいレモンレモンなんだけれど、微妙に違つた。そういう凄く小さな違いに気づくたび、それを認識するたびに、「ここは僕が生まれ育つた世界ではないと思つ。

」

僕が果物をもぐたび、すつと籠を持ち上げるハーヴェル。

その日は、それで何を作るの、と問い合わせるようにキラキラしていた。

柑橘類はいろいろと使える。ジャムにしたり、紅茶とかに入れたり、料理の下味などに使ってみたり。これはさすがに無理だけど、そのまま食べるなんて選択肢もあるだろ。

今日は……そうだな、ドレッシングに使おう。

果汁を絞つて、皮もきれいに洗つて細く切つて混ぜて。

「畑から野菜を取つてこなきゃなあ……」

お師匠は基本自給自足が好きらしく、僕が作った家庭菜園をよくいじついていた。どこからか持つてきた謎の苗を植えたり、水を

やつたり、肥料らしもものをまいていたり。

僕がひそかに福袋苗と呼んでいるあれは、森の中で見つけてくるそうだ。これは何ができるかなど子供のよつにほしゃがれたら、僕には笑顔で苗を丁寧に植える以外の選択肢はない。だつてはしゃべお師匠は、とてもとても可愛いから。

ちなみに、謎の苗はだいたい野菜かハーブらしきものができる。トマトのようなものやジャガイモのようなもの。丸いトウモロコシみたいなのがなつたのもあった。

いくつかはさらに種を取り、畑に植えていたりする。

……季節やら土地やら気温やら何やらといった細かい要素は、あまり関係ない世界なんだろうか。要するにどこででも何でも育つ的な。便利だけど、僕としては違和感が少しだけ。

とはいえ細かいところを気にして仕方がないし、都合もいいし、ありがたくこの世界の不思議な仕組みを受け入れることにしている。少なくとも、害になるものではないのだし。

「ありがとうハーヴェル」

「

ハーヴェルに持つてもらつていた籠を受け取り、頭をなでる。うれしそうに少し微笑んで、彼女は家の中に走つて戻つていった。それと入れ替わるよつ。

「弟子ぐーん」

お師匠がギューンと飛んでくる。

僕にぶつかるというブレーキをかけ、お師匠は僕のそばに急接近した。

「じゃーん、みてみてー」

得意げに差し出されたのは、福袋苗。
ああ、また持ってきたんですね、と答えつつ、僕はどうこ植える
か考えていた。

21・木陰の振り篭で

穏やかな気候は、どうしても睡魔を呼び寄せる。

一番危ないのは昼食後だ。お腹がいっぱいになつて気温も程よくて、どんなにしっかり睡眠をとつても、ついつい眠くなつてしまつ。横になつたら、もつ戻つてこられない。

特に危ないのはお師匠だ。

「……むにゅ」

現在、実に幸せそうな寝顔を僕にさらしつつ、木陰で惰眠をむさぼつている。食べてすぐに寢るのは身体によくないと、あれほど齧したにもかかわらず効果は限りなくゼロだつた。

お師匠はお世辞にも寝相がいいとはいがたく、普通に田の毒なんですけど。

「う……振り上げた足とか、いろいろと。

今度、お師匠にロングスカートなどを買い与えなければ。マキシ丈のスカートをはいている女の子を町で見かけた。あれなら多少足を振り上げても大丈夫なはず、きっとたぶん。

問題はそういうのをお師匠が気に入るかどうか、だ。こと、「とく所持している服のスカート丈は短いから、もしかすると長いスカートは嫌いなのかもしねえ」動きにくいだらうし。

問題は、手に入れたとしてどうやって着せるか、といつてこと。
普通に進めても着てくれるとは思えない。

たぶん僕が褒めたら、気を良くしてきてくれるよつになるんだろううけど。まずは着用するという最初の一歩を、何とかして踏み出してもらわないと。そこが一番の壁であり問題だ。

しかしこの前に買い物に行つたから、当分出かけないと思つ。足りない調味料も、足りている調味料も、一通り買い込んだのが痛い。

一番少ないので「ショウウなんだけど、これまでの経験上からして普通に使い切るつと思つたら一ヶ月以上はかかる。もううん「ショウウ三昧のメニューにすれば、もつと早くなるけど。

「さすがにそこまでは……」

そんなわけで、僕は現状に耐える以外のすべを失つた。

お師匠は、一度男子高校生世代の脳内を覗いて自重を知るべきだと思つ。中学生まで範囲を下げてもいいかもしない。それとも、この世界の同年代はみんな達観しているのだろうか。

……いや、それはないだらう。

お師匠が無頓着で、自覚が皆無なだけだ。

あとは、きっと僕がそもそも異性というカテゴリーにいないんだと思う。悲しい話だけど僕はお師匠にとって弟子以外の何者でもなく、種族だと年齢だと性別だと些細なことで。

それはそれで切ないような、くつつかれたりでうれしいような、ちょっとだけ複雑だ。

さて、そのまま寝かしていたら風邪を引く。

僕は物置から薄い毛布のような布を引っ張り出して、お師匠のところに戻つた。

「

なぜか、ハーヴェルがそこにいた。

お師匠の隣で、ネコのよろこび少し身を丸くして。

ほんの一分かそこらの間に出現した彼女にも毛布をかけて、僕は家へ戻る。時計の時刻はちょうどお昼とおやつの間。今からなら、

少し凝ったものが作れると思つ。

棚から砂糖や小麦粉を引っ張り出しながら、僕はぼんやり考えた。お師匠がいて、僕がいて、そしてハーヴェルもいる。実際に穏やかで平和な日常だ。意味もなく笑つてしないそうになるくらいに、僕が置かれた環境は幸せなものだ。

いつまでも続けばいい。

この日々が、いつまでも続けばいい。

そんな都合のいい展開なんて、ありえないとわかっているけど。

22・麗しき魔女の来訪

その日はいつも通りだった。

夜更かしをしたのか、寝起きが良くないハーヴェルに甘いココアを出し。

セラも甘いのがいいよー、と喚きだした、さつきまでブラックのコーヒーを所望していたお師匠に、普通にコーヒーを出し。自分用にあつさりとした紅茶を入れて、パンをかじつて。

そんなびっくりするほど穏やかな朝に。

「失礼するよ」

その人はやつてきた。

黒いドレスは、胸元があらわになつてなまめかしく、左右にはかなりきわどいところにまで達しているスリット。どこの貴婦人だ、女王だ、と言わんばかりのいでたちの美女。

その耳はエルフよろしく長く、少し垂れた感じだった。

お師匠はあいた口をパクパクさせ、彼女を指差し。

「パメラ……！」

何度か聞いた名前を口にした。

パメラ・シェルシュタイン。

世界的にかなり有名な魔法使いの一門に所属する、知らぬものがいない魔女。エルフ種という長命な種族の生まれで、ぱっと見は二十台前半だけですでに数百年は生きているという。

お師匠の古い友人であり、ハーヴェルをここに預けた張本人だ。黒髪を揺らし、パメラさんはリビングのソファーに腰掛ける。そこ、お師匠のお気に入りの場所と言うが定位置なんですけどね。ほ

ら、お師匠がワナワナと震えだしてゐるし……。

どうやつてお師匠をなだめようか考える僕をよそに、事態は勝手に進行する。

ハーヴェルは朝食もそのままに、パメラさんに向かって走つていった。

そして、抱きつぐ。

「

「よしよし、元気だつたかい？」

「

「そうかい……それはよかつた

どことなくキツい印象を受けるその美麗な顔に、優しい笑みが浮かんだ。

それを見ていたお師匠は、すっかり怒りなど引っ込んでしまったのか。

「それでさー、ハーヴェルに関する揉め事は収まつたの？」

元の大きさに戻つて、ふわふわと友人の所に飛んでいく。僕はとりあえず紅茶を用意することにした。そもそもハーヴェルに関しては、お師匠が頼まれたことで僕は関係ない。

……氣にならないわけではない。

だから準備をしながらも、しつかりと聞き耳は立てている。

おそらく、という言葉をつける必要はないんだろうけど、今回の一件について何か動きがあつたんだと思う。でなければ、渦中の人である彼女がここに来る理由などないわけだし。

問題はそれが吉報なのか、その逆なのか。あの様子からして悪い知らせではない……と思うけど、ハーヴェルの前だから、それらを見せないようにしているのかもしれない。

ハーヴェルはもう充分なほど傷ついた。

これ以上は、要らない。

「一応、話はついたよ」

僕が用意したお茶を飲み、パメラさんが口を開く。
「ハーヴェルはもう自由さ……」この子は、歌姫でも何でもない
その言葉に僕とお師匠は顔を見合わせ笑みを浮かべる。
だけど次の言葉に、それは凍りついた。

「ただ、ハーヴェルには死んでもらうことになつた」

淡々とした、わずかに笑みすらこもつたその一言で。

「この子の母親が有名な歌姫でね、その娘も以下略つてわけや。」
つまり、ハーヴェル・シルスという歌姫の娘に『歌姫になる』以外の未来なんて、誰も用意してなかつたわけでね」

歌姫以外のハーヴェル・シルスの存在は許さない、だそうだ、と
パメラさんははき捨てるようなため息をこぼす。発言者に対し、心底あきれ果てているのがわかつた。

だけど、だからって死んでもらうつって……。

「ハーヴェル、大丈夫？」

「」

パメラさんの隣にいるハーヴェルから、表情が失せていた。

ぎゅっとひざの上で握った手は、力を入れすぎて白くなっている。
その手を、ずっと小さな手で何度もながら、お師匠は心配そう
にしていた。そして傍らのパメラさんを見上げて。

「どうするの？」

「実際に死なせるわけじゃない。歌姫には死の儀式があつてね、まあ、要するに一般で言うお葬式つてやつなんだけども。それをするために必要なものを提供すれば命は問わない、とさ」

「その……必要なもの、とは？」

僕は思わず問いかけていた。

パメラさんは苦笑を浮かべて答える。

「ハーヴェルの『前』と、その後」

パメラさんの来訪から少しして、『死の儀式』の準備は始まった。何でも特定の日の夜に、と決まっているらしい。

「名前は後々考えるとして、まずは髪だね」

どこからか取り出されたのは、美しい装飾を施したハサミだった。聞けば、歌姫の死の儀式にのみ使うものらしい。本当は向こうの関係者が直々に尋ねる予定だったそうだけど、パメラさんが半ば奪うようにしてわざわざ預かってきたそうだ。

それは、ここが知られてハーヴェルが連れ戻される、などの裏切りを警戒したことなどだと僕は思うのだけど、逆に疑われたりはしなかつたのだろうか。

「ああ、それは心配ないよ。歌姫の血統は独特でね。偽者なんて通用しないさ」

しかし、とパメラさんの手に握られたハサミが、ハーヴェルの髪を切り落とす。

ハーヴェルはずつとうつむいたままだった。お師匠は傍らに立て、落ちた髪を丁寧に拾つて集めている。僕はとこうと、ランプを手にパメラさんの手元を照らす係だ。

本来なら厳かな神事で、お香を焚いた専用の部屋で行うらしい。遺体は神殿とやらの置くに安置し、切られた髪を人々に見せ歌姫の死を知らせ、その髪を通常の遺体として埋葬するという。だから歌姫は、その候補のころから髪を長く伸ばすそつだ。

……髪の毛べらつは、なんて言つことはできない。

歌姫の象徴で、ハーヴェルだってそのために伸ばしてきたんだと

思つ。それを、命を救うためとはいえ、自由になるためとはいえて、こつして切り捨てなければならないなんて。

いざれ生きていれば伸びる、なんてくだらない説得は無意味。ただのほほんと生きてただけの僕には、きっとわからないと思つ。

小さなハーヴェルが背負つてきたものの重さ。
それらを失つ苦しさ悲しさなんて。

「……さて、これで髪は終わつたね」

肩につく程度の長さに切りそろえられた、ハーヴェルの髪。
これはこれでかわいらしい感じだ。

「次は名前だけど……自分で考えたかい？」

「」

「ぐん、とハーヴェルは返事をする。
懐から出した紙には、少し歪んでいるけれどしっかりとした字で。

「ハル　いい名前じゃないか」

パメラさんは少し誇らしげに笑つてから、ハーヴェルの喉にそつと触れた。少し伸ばしてつややかに整えられたつめの先が、ゆつくりと少女の首の黒いあざを撫でる。

その瞬間だつた。

ハーヴェルの声を殺したそのあざが、うつすらと青く光り、まるで水に溶けていくよにじわりじわりと薄れていく。あれほどはつきり、そしてくつ毛りと刻まれていたものが。

「あ……」

それがすべて消えたころ、小さな声が漏れた。

それはかわいらしい声だつた。

澄んだ鉄琴のような、けれどやわらかいきれいな声だつた。

それがハーヴェルの ハルの声だと最初は理解が追いつかなくて、誰もが無言で彼女の喉元を見つめる。あの、黒い刻印が消え去つた、本来の白さをさらすその肌を。

「これはアタシからの贈り物さ。戻すなとは言われてないからねえ」

ククク、と肩を揺らしてパメラさんは笑つて。

「ああ、ちゃんとお礼は別に用意するから安心おし」

「いや……要らないよ。セラは何もしてないもの」

これだけでいいよ、とお師匠は満足そうに笑つて。そしてハルにくつついで、グリグリと頬擦りした。ハルはくすぐつたそうにして、少しだけ目じりに涙を浮かべて笑つて。76

そこに二つの、小さな笑い声があることに僕の視界は少し歪んだ。「弟子にするのを諦めさせられたんだからねえ……これくらいはしないと。アタシとしてはまだまだ連中を許さないっていうか、次こそは徹底的に叩き潰してやるつもりさ、ククク」
「パメラ……まさかこれが『はじめて』じゃない、とか？」
「魔女としての才能がある場合、歌姫としても優れるからねえ」と、不気味かつ意味深に笑うパメラさん。

僕は思った。

この人にだけはケンカを売つてはいけないのだと。

朝になつた。

これからハルは、ハル・シェルシュタインという名前で、メルフエニカの魔法学校に通うことになつていて。元は歌姫でもあつたわけで、魔法使いとしての才能は母親譲りなんだとか。

だから、それを生かす道が最適という判断からだ。

学校は学期の途中らしいけれど、ハルは才能があるから大丈夫、とのこと。

「学校はねー、きっと楽しそうと思つよー」

お師匠は、さつさから念入りにハルの髪をいじつていた。

少しでも長く一緒にいたいのかも知れない。

だけど、長こじわなうともかくすつかり短くなつてしまつた髪は、そう長々と弄繰り回せるものでもなくて。しばらくするとお師匠は、名残惜しそうに作業を終わらせた。

「メルフエニカの魔法学校はいいトコだとセラが保障するよ。だつて、セラが時々せんせーしてるとこだからね。何かあつたらセラの名前を出すといいと思つよ」

「うん……ありがと、セラお姉ちゃん」

ぎゅうぎゅううと、子供のような大きさのお師匠と、子供のハルが抱きしめあつ。僕はまとめられたハルの荷物を持って、それを見ている。ここは混ざるべきだらうけど、恥ずかしい。

「お兄ちゃんも、ありがと」

それからハルは僕に駆け寄つてきて、ぎゅううと抱きついた。

まだ彼女の声を聞いてから数時間しか経つていないので、その声はすっかり耳になじんでしまつてゐる。だからこそ、声を聞いてし

まつたからこそ、寂しさはさらに募つた。

もう、この声を聞く機会は当分ないんだと。

そう……わかっているから。

「セラセーさん、そろそろ行きますよー」
外からミーネさんの声。

彼女がメルフュニカの学校まで、ハルを送ってくれることになつていて。なお、パメラさんはハルの髪を持つて、夜のうちにここを去つてしまつた。何というか……忙しい人だ。

僕は家の外に出て荷物をミーネさんに渡し、ハルの頭を撫でる。

言葉はない。

なくとも問題ない。

がんばつておいで。

ハルはにっこりと笑つた。子供らしく、満面の笑みだ。

大丈夫。声にしなくたつて、僕の思ひはちやんと届いている。

「じゃ、出発しまーす」

「気をつけてねー。なんかね、最近メルフュニカは気候崩れ気味らしいからー」

「了解つす」

確認するように、ミーネのドラゴンが羽を上下させる。

軽い上下の運動はだんだんと力を増し、ドラゴンの身体がわずかに浮き上がつた。

「あの……！」

ミーネの腕の中にいるハルが、僕とお師匠を見る。

「わたし、がんばる。セラお姉ちゃんみたいな、パメラさんみたい

な魔女に……」

なるから、と。

少し泣いているような声と笑顔を残し、ドラゴンは一気に空へと舞い上がった。下の僕らに挨拶するように何度も旋回し、一気に遠くへと飛び去っていく。

その姿はあつという間に見えなくなつて、そして僕とお師匠だけが残された。

「なんか、寂しくなりますね」

「そだねー」

ふわふわと僕の隣に浮いているお師匠。吹き飛ばされないようヒトの姿だったけど、いつの間にか元に戻つたよつた。長時間ヒトの姿だったので疲れたのか、ふわりと僕の肩に座る。

「ハルからはねー、いろんなものをもらつたような気がするんだよ

「……そう、ですね」

「これからもがんばらなきゃねー」

ハルに負けてはいられないんだよう、ヒトを鼓舞するお師匠。確かにその通りだ。

幼い彼女が遠い異国でがんばるのだから、ヒツチも負けてはいられない。僕は彼女と違つて才能が皆無のようだけど、せめて簡単な魔法だけでも使えるようになつておかないと。

……さて、まずは今日のおやつの準備からはじめようか。
腹が減つては戦はできぬ、というしね。

畑を拡張した。

いろいろとお師匠が拾つてくるから、スペースが手狭になつたからだ。

一応、加減してくださいとは言つたんだけど……。

「……さすがに、木の苗は」

僕の前には無造作に引っこ抜かれたままの、哀れな木の苗が三つほど。果樹は充分なほどにあるからとつてこなくてもいい、と言つた僕の言葉は右から左へ押し流されていったようだ。

とりあえず開いたスペースに穴を掘つて、いつものように苗木を植えていく。

……たぶん、本職の人があみたら激怒するか哀れむかのどっちかだろつ。

まさに『植えるだけ』だから。

しかし僕にもお師匠にも、こっち系の知識はあまりない。一応、申し訳程度に肥料をたっぷりとやるので、それなりに成長して、それなりの数と味の実をつけてくれているけども。

そんなの偶然運が良かつただけかもしれないわけで。

「だから持つてこないでほしいうて、言つたんだけどなあ……」

三本目の苗を植えながらため息を一つ。

ちなみにお師匠は家の中で、収穫したての果物の選別中だ。取れた果物は基本的に生で食べる用と、料理に使う用などに分けている。中途半端なのは、全部まとめてジャムにする。

ジャムはパンに塗つたり、料理に使つたり。

肉類のソースに使うとなかなか美味なものになる、とお師匠は言う。確かにフルーティでもとの世界で市販されていたソース類と、何ら変わらないおいしさの物に仕上がっていた。

まあ、肉なんてそうめつたに手に入らないんだけど。なので基本はパンにつけて、時々ドレッシングに使うぐらいか。パン食なので結構消費が激しく、作つても作つてもすぐになくなつてしまつ。

「弟子くーん、お仕事終わつたよーう」

お師匠がぴゅーんと飛んできた。

「こつちも終わりました。じゃあ一息入れたら続きをしますか」

「そだねー。今日はセラがお茶を淹れるよー」

僕の目の前でくるんとターンし、お師匠はまた家中へと戻つていつた。今いるのはちょうど家の裏手で、こちら側に面する扉はなく、窓から出入りできるのが少しつらやましい。

僕は汚れた皮の手袋と、スコップなどを適当な場所に置いて歩き出す。

かすかに紅茶と、焼き菓子をあぶつたいい香りが漂つてきた。早く早くー、と僕をせかす声が窓の向こつから聞こえる。再突撃されなこつちに、僕は慌てて家中に戻つた。

そこにはヒトの姿のお師匠が、意味もなく魔法で茶器を浮かしつお茶を淹れついて。

「ひあひあ弟子くーん、そこに座りたまえよ」

得意げに笑う姿があつた。

そういうところがたまらなく可愛いなあ、と思いつつ。そんな本音を知られたら大暴走されて理性が大迷惑なので、いつものように淡々と僕は椅子に腰掛けるのだった。

見よう見まねもバカにできないと、僕はこの世界に来て常々思つてゐる。

百聞は一見に、とは言わないので、見るだけでも見ておくと意外と何とかなつたりするものだ。特に意味もなく、煙をいじくる番組を見ていた過去の自分を、僕は褒め称えた。

ある程度『見まね』ができるなら、そこからは日々の積み重ねと経験でカバー。

そうして作られ、日々拡張される僕の家庭菜園。素人臭いながら、そこそこ見栄えも良くまとまつていて自負している。お師匠も、弟子くんは凄いねーと褒めてくれるし。

「ふう……」んなもんか

僕はスコップを傍らに置いて、真新しい畑を眺める。

この前、ミーネさんから購入した野菜の種を早速植えてみた。その形状と味などから、ソレがタマネギに限りなく近いものであるとわかり、少々調子に乗つて多めに植えた。

タマネギはいろいろと使い道があるし、そこそこ保存が利く。多めに作つても、消費するのに苦労はしないはずだ。

「おつかれさまー」

お師匠が僕のそばに飛んでくる。少し顔がすすぐれていた。どうやら『お仕事』をしていたらしい。ハルがいる間は、危ないからとやめていたのを、最近再開したところだ。

この畑も本当は、ハルと一緒に作業しようと思つていたのだけど

……仕方ない。

今頃はがんばって勉強しているのだろうか。

便りがないのがなんていいうけれど、落ち着いた頃合に手紙を出そうと思う。向こうもじつちを心配しているかも知れないし、一番近くにいる知り合いは、たぶん僕とお師匠だ。

パメラさんはショルシュタインの里にいる。

海の向こうはあまりにも遠い。

ちなみに手紙のことはまだお師匠には何も言つてない。あくまでも出してみようかなって感じだし、直接会いにいけるならそつちの方がいいかもしないとか思つたりもしている。

どつちにせよ、お師匠を経由して準備することになるだろう。だから忘れないうちに話しておこうと思つたけど、お師匠せどりやう目の前のご馳走予備軍しか入つていないので。

「ねえねえ弟子くん、ここには何を植えたの？」

「タマネギの一種だと、ミーネさんは言つてました」

「ふうん……」

「タマネギはいろいろ使えますから、料理のしがいがあると思いますよ」

「そーなの？」

「ええ。焦げない程度に焼いて煮込んでスープにしたり。あとは他の料理に『隠し味』として混ぜてみたり。薄く切つて水にさらして、サラダに入れるのもいいですね」

「……いいねえ」

「魚にもあうと思いますよ」

「お魚なら、手に入るからおいしく食べられそうだねえ」

「たくさん植えましたからね。いろいろチャレンジしてみましょうか」

と、まだ芽も出でていない畑を眺め、ニヤニヤする僕らはまだかし不気味だろう。

「この後、タマネギが実ったのはいいけど、大きさが僕の顔ぐらいあるとんでもない品種だと知つて、チャレンジし続けるもすぐにネタ切れを起こすという悲劇を味わうのだけど。それはもうちょっと先の話になる。

27・美味への欲は止まらない

「おーなーかーすーいーたーよーう」

「あなたは子供ですか」

じつたんばつたん、と僕の肩に乗つて暴れるお師匠。

庭弄りが長引いてしまつて、今日の夕食は一時間ぐらい遅れてい
る。お師匠は基本、決まつた時間にご飯を食べているので、身体が
その時間に合わせるように空腹になつてこむらじい。

それに遅れてしまつたのだからさあ大変。

ハラヘリモードのお師匠は、買つて買つてと駄々をこねる子供と
同類だ。

正直、耳元で騒がれるのでかなりキツい。

つまんで他所におくにせよ、飛んでくるので無意味だし。

なので僕はおとなしく、騒音に耐えつつ料理続行。しばらくする
と疲れて、しょぼーんと静かになつてくれるし。そつ……ほんの少
し、耐えればいいだけの話だ。

案の定、しばらくわめいて静かになつたお師匠を肩に乗せ、僕は
切つた野菜をバターを溶かしたフライパンに入れる。タマネギとに
んじん、あとブロッコリーのよつた何か。

一通り火が通ると、傍らに置いてある水の入つた鍋に入れて火の
上に乗せる。

その間にフライパンにバターを足し、鶏肉を皮を下にして並べた。

これはお師匠が罠を仕掛けて取つてきたらしい。……ああ、すつ
かり鳥や魚ぐらいなら平氣でさばけるようになつてしまつた。慣れ

とは実に恐ろしく柔軟なものだと僕は知った。

鳥の表面がこんがりしたら、それも鍋に入れると。

最後の仕上げに、僕はフライパンにバターと、そして小麦粉を入れた。傍らには牛乳というよりも生クリームに近い牛乳が、ずっと前から出番を待っている。

いま作っているのは、最近になつてやつと焦がさなくなつたホワイトソース。

そう 今日のメニューは、シチューだ。

「お師匠は鍋の方、見てくださいね」

「うー

だるそうな返事をしつつ、ヒトの姿になつたお師匠は僕の隣に立つ。今にも死にそうなしょんぼりモードのまま、それでもテキパキとあくをすくつては撤去する作業をしている。

一通りソースが完成し、野菜や鳥もくつたりと煮えて。

「お師匠、そこどいてください」

「うー

元の大きさに戻つたお師匠をまた肩に乗せ、僕はフライパンの中身を鍋に入れた。ゆっくりとおたまで巻き混ぜ、一度味をみる。すこし牛乳と塩、ついでにコショウを入れた。

「んー、んふふー。弟子くんのおりょーりー

香りですっかり元気を取り戻したのか、お師匠は「機嫌だ。

「そんな喜ぶほどのことですか？ 食事はいつも僕が作ってるのに

……

「だってセラは、弟子くんのお料理が好きなんだもん」

ふわり、と鍋を覗き込みながら、お師匠はうつとりしている。

「シチューは甘くてトロトロで、かれ？ つていうスペイシーなの
もおいしいし。セラ、煮付けたお魚があんなにおいしいなんて思わ
なかつたよー。だから弟子くんのお料理が好きなの」

たまんないよう、とお師匠はどこか虚空を見上げて呟く。
……どうやら、餽付けしそぎたようだ。

「呼びたまえ！」

「……は？」

のんびりとした朝。

お師匠はおはようの挨拶よりも先に、そんな叫びを放つた。
さらには僕の田の前で、むんつと腕を組み。

「思うに弟子くんは、セラへの敬いが足りない気がするんだよねー」
などと、実に心外なことまで言い出す。

何か至らないところがあつたのだろうかと考へるけれど、特に思
い当たらない。

日々の食事には決して手抜きなどしないし、合間に行う魔法の勉
強だって 実技がからつきしこう以外は順調だ。少なく
とも調合に関しては、精度が上がっている、はず。
ましてや敬いの心が足りないなんて、あつてはならないことだ。

なれない料理に勤しんだのも、爆発に咽ながら使えもしない魔法
の勉強をしたのも。
すべてお師匠ただ一人のためなのに。

「ちゃんと敬つてますよ」

「ホントかなー？ セラのことを、愛玩動物みたいに思つてない？」

「……」

思わず、無言になってしまった。

確かにお師匠のことを可愛がるのは僕の趣味の一つだ。

指先や手のひらで頭を撫でると、まるで猫のようになり田を細める姿
とか、たまらない。特に意味も理由もなく、無性に撫でたくなるこ

ともある。だつて、お歸匠がすくかわいいから。
だから、つい愛玩してしまつわけで……。

「やつぱりー！ セラはおとなのレディなんだよ！ きつとたぶん
弟子くんより年上のはずなんだからーつ。弟子くんのバカバカバカ
ー！ セラのこと、ペットとか思つてたんだあー！」

皿の前を上下左右に飛び回るお歸匠。

最後に僕の胸に思いつきり体当たりして。

「弟子くんのバカ」

そのまま、動かなくなつてしまつた。

どうやらすねてしまつたらしい。

これはこれでかわいいなあ、とか思つたりもするんだけど、さす
がにそれを口にすると後が厄介だし、このままでいられても何かと
困るので、なんとか機嫌を直してもらおう。

とりあえず、指先で後頭部を撫でてみた。

すると、かすかにうれしそうな笑い声が聞こえる。

この程度で単純だとか、僕は思わない。むしろこの程度で機嫌が
良くなるくらい、僕を好ましいと思つてくれているんだと自惚れて
みる。それは、この上ない喜びだ。

まるで蝶のようになふわりと僕から飛び立つたお歸匠は、今度は僕
の手に止まつた。

手をおわんのようになくすると、次はその中にすっぽりと納まる。

「で、イヤですか？」

「……ちうじけ、くるしゅーなー」

『満悦の様子で僕の手の中にいるお歸匠。

そんなんだから、つっこ愛玩したくなるんですよ。

……れて。

僕は現在『迷子』だ。

ちょっと散歩のつもりで森に入ったのはいいんだけど、見事に迷つた。周りは同じような木ばかりだし、道らしい道もない。不用意といえば不用意なんだけど……うん。

でもこんなに迷いややすい場所だとは思わなかつた。

お師匠はしおりを散歩してゐるにな……。

「上からだと、田舎か何かがあるのかな」

などと弦きながら上を見るも、そこには多い茂る木の葉っぱ。とても違う景色が広がっているようでは思えない。むしろ地上の方が、まだわかりやすいんじやないかとやれ思つ。むき出しの枝や、木の実がなつてゐる茂みとかがあるから。

まあ、そんなわけでしばらくは飢え死になんてことはない……と思つ。

思いたい。

とりあえず僕は、茂みのそばに腰を下ろした。

僕の記憶が正しければ、こんな形の木の実をお師匠が持ち帰つたことがあつた。つまりこの辺りはお師匠の『庭』の可能性がある。ヘタに動き回るよつは、それを期待する方がいい。

後できるひととこええ、耳を澄ますことだけだ。

獣という危険を察知するためでもあるし、お師匠の声やヒトの物音を聞き取らないと。

さて、後ほどわざわざ見てもらひたるが。

「あれあれ弟子くん、なにしているの?」

……。

「お散歩なの？ つかれた？」

「ええ、まあ……」

僕の田の前にてお師匠。

その向こうの向こう……木の葉の合間にには、実に見覚えのある屋根。たぶん、全力で走れば十数秒でたどり着けそうな距離だ。いくら木の葉が合つたとはいへ、どうして……。

「もう大丈夫だと思つたけどねー。念のために、えいえいつと、お師匠は僕の頭上をぐるぐると旋回する。

それから、こつものように肩に座つて。

「この森ねー、精霊とかいっぽいだから迷つていつか、迷わされるんだよねー。すぐそこに目的地があつても、隠されて気づかなかつたりね。ただの悪戯だから、遭難はしないけど」

「はあ……」

「だから、お散歩するならセリフと一緒にね。セリフと一緒に悪戯されないから」

任せてよ、とお師匠は言つてくれるけど……。

たぶん、当分僕は森に行かないと思います。

今日の料理当番はお師匠だ。

何でも、知り合いの獵師に丸々とした鳥をもらつたらしい。その筋のプロによつて捌かれた鳥は、僕がやるのとはまるで違うものに見えた。生前の姿はさつぱりとわからないけれど、肉としての形状は、まさに七面鳥といった感じだろうか。

そう、師走のシーズンにテレビの向こう側に揃むばかりのアレだ。

……そういえば、一度食べてみたいつて思つたなあ。

「セーーと、セラもちよつとはお料理できるんだからねー」「わかつてますよ、それくらい」

直々に教えられたのだから、さすがにそれはわかつてゐる。大人サイズのキッチンは、小柄なお師匠には少々大きすぎる感じだけれど、二つほど設置された踏み台の上を軽やかに行き来することでカバーしている。とはいへ足元が危なつかしい。

……今度、もう少し大きい踏み台を作りつと思つ。

「で、その鳥肉はどうするんです?」

「やつぱり丸焼きだよ。……つてことで、弟子くん弟子くん、ハーブとつてきてー」

「肉料理に良く使うアレですか?」

「そー、あれー」

わかりました、と僕はキッチン脇の扉から外に出る。この世界にも勝手口というものはあるようだ。扉の向こうには、僕が来る前からあつたハーブ畑がある。

まあ……畠といつか素焼きのプランターが並んでいるだけ、なんだけれども。

そこから鳥肉料理で良く使うハーブを収穫する。

結構な量が必要になるかもしねないので、少しづ多いかなってぐらい。

「お師匠、採つてきました」

「んとねー、じゃあ弟子くんにはタレを作つてもらおうかなー」

「タレ、ですか」

「そだよう。まずハーブを適当にちぎつてねー、それを調味料の中に入れるのー。調味料はワインとか塩コショウとか。ニンニクも必要だねー。あと、セラは隠し味にこれを入れるの」と、お師匠が取り出したのは。

「タマネギ……と、果物?」

丸々としたタマネギと、昨日木からも「できたばかりの柑橘系の果物。

「そそ。これを摩り下ろすんだよう。果物は搾るの」

その後、他の調味料を全部混ぜてしばらく置いて、火にかけてワインのアルコールを少し飛ばすんだとか。ちにタレはタレでもつけるのではなく、漬け込むためのものらしい。

タレ改め漬け汁は、肉の中に詰めるものと混ぜてしまつらじい。つけたりかけたりするタレは、別に丁寧に作るんだとか。

「あ、でも弟子くんは「モモだからワインは触つかやメーなの。セラがやるよー」

「じゃあ、僕はタマネギをやつときますね」

とりあえず僕は袖をまくつて、お師匠の隣で作業を開始した。

まあ、どんな味になるんだかわ.....楽しみだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542y/>

手乗り魔女と異世界からきた弟子

2011年12月20日06時45分発行